

特113

405

頓野今係紀念誌



始



特113
405



頓野
合併記念誌

大正
15. 12. 13
内交

はしがき

本村は英彦、徳門二山と共に九州鎮護の靈社と稱せられたる鳥野神福地修驗のありし處にして古代からの歴史を有する處である。又一面古實や傳説に富むこと殆んど鞍手郡隨一の觀がある。今や本村は解体して直方、新入、福地、下境の四ヶ町村と合併して新直方町の一部となる。この機會に於て本村の古き歴史や史實、傳説を集め、合併記念として世に遺さんとする事の決して徒爾の業でないことを確信する。

大正十五年十一月

編者 讀す

目次

頓野村の沿革	一	礦業	一七
土地變移考、地名考	五	產物名產	一九
位置境界	六	神社寺院	二〇
地勢區劃	六	名勝古蹟	二九
地質炭脈	八	傳說古事	三四
行政官衙	八	天災	三五
歷代村長、助役、收入役、縣郡會議員		善行孝子	三六
前現村會議員、吏員、區長、巡查駐在所		統計	四一
交通通信	一二	人物	四三
教育團體	一二		



筑豊山學學校



先村長故帆足勝彦氏



礦業家貝島嘉藏氏

前村長
野利重氏



現村長
香月亮介氏



有志者
故松尾庄右衛門氏



有志者
故中川半六氏



有志者
渡邊儀七郎氏



有志者
阿部健藏氏



有志者
長井瀧平氏



有志者
中川爲吉氏



八幡神社々掌
渡邊正臣氏



有志者
香月久内氏



村農會總代
有田岩吉氏



有志者
永富常吉氏





村農會總代
行實鐵太郎氏



有志者
吉川監十郎氏



現村會議員
瓜生碩爾氏



有志者
香月樂平氏



前村會議員
香月貞次郎氏



烏野神社々堂
故水田勤氏



村農會總代
藤田幸太郎氏



有志者
永島辰次郎氏



前村會議員
宮近土五郎氏



前村會議員
田丸富太郎氏



有志者
下藤梅吉氏



有志者
故林勇平氏



有志者
安田初太郎氏



現村會議員
安田福藏氏



現村會議員
山長繁氏



有志者
故澁田久吉氏



有志者
中川宇次郎氏



有志者
阿部倫氏



現村會議員
中川千太郎氏



現村會議員
永富音吉氏



縣會議員
山本敏彦氏



前村會議員
石橋伸太郎氏



學校醫
國雄氏



頓野區長
許斐久米吉氏

現村會議員
渡邊正次郎氏



有志者
岩見秀吉氏



有志者
松野茂太郎氏



産米検査員
永富太郎吉氏



村農會總代
大場孫太郎氏



前村會議員
山近林氏



村農會總代
淺川常氏



感田尋常高等小學校長
高倉洗助氏



現村會議員
古田良造氏



現村會議員
山本半平氏



前村會議員
古井嘉平次氏



收入役
栗原豊助氏





村數住源氏



庶務主任
武内高次郎氏



上頓野青年支會長
田丸昇三郎氏



學校醫
魚住友治氏



上頓野尋常小學校長
出光徹三氏



上頓野青年支會長
産米検査員
香月博藏氏



現村會議員
阿部賢一郎氏



現村會議員
大野順藏氏



有志者
岸田勝次氏



前村會議員
桃田小平氏



助役
上川虎吉氏



現村會議員
橋宗太郎氏

有志者
安田仁一郎氏



頓野青年支會長
山本太壯氏



村農會總代
瀧田英雄氏



前頓野青年支會長
山本儀八郎氏



編纂者
和田泰光

頓野合併記念誌

頓野村の沿革

日本書記に天津彦火瓊々杵尊降於日向樓日高千穗之峯而啓穴胸副國自頓丘上竟國行云々どあり。又近津宮舊記に菟波二神彦山御垂跡の冢鳥埜高津の門に天降給志賀云々と記録され尙頓野神社古記によると天孫瓊々杵尊日向國高千穗峰に座ます時本朝衣食の玄靈保食大神の洪徳に感せられ勅願を發して猿田猿女の二神をして其本地を尋ねしめて當山に鎮祭せしめ國家民生の福祉を祈らしめたとあり。往昔我鳥野神社は皇室より異例の御崇敬を蒙り乃ち英彦、竈門西山と相並んで鎮西守護の三峰とされて居た等本村は太古からの靈場とされて居た。

景行天皇二十七年熊襲王命に従はず太子小碓尊之を征伐せんと其秋九州に下らせ給ひし時地の高低を察し給はんとして本村尺岳山に上らせられて本村を望ませ「阿那盛

なる田面哉」「阿那美しき富野哉」と宣ふた事は尺之岳神社縁起に記す處であるが爾來盛田を感田と謂ひ富野地を頓野と言ふとある。

越へて 神功皇后は遠賀郡蘆屋町から御船を進め給ひて本村に駐らせ給ふた事は俗談解辨卷の四に 神功皇后入水蒸崗港之時縣主熊罥穿池集鳥魚下時此地雁常往返彼池奉慰御心武内宿禰奉勅命安住希成者給雁飼料云々とあり故に雁田と言ふとあり後感田と訛傳したものであらうか。

延暦二十三年傳教大師は本村に來錫して求法を祈りて大塔を建て、大同元年弘法大師も求法の爲め本村に駐錫して鐘樓を建て、又敕使大安寺一如聖人も來錫して聖朝安靜を祈つた等往古名僧智識は本村に來錫された等光輝ある歴史を有して居る。

今を距る九百八十三年の昔天慶五年藤原純友叛逆して九州にて暴威を振ふたので、多田滿仲公大將軍として下りて本村羽高の丘上に陣を張つた事は本村古記又は傳説に明らかで、尙當時本村大城原に源經基が城を築いた事は古記又は地名として遺つて居るから見ても明かである。

降つて永承年間長谷川兵部卿鷹取城を築くとあり又正慶二年太宰少貳頼尙が同城を築けりとも記録されて居るが以後應永六年肥後菊地太郎武宗や又永正元年大友宗麟の爲めに攻められたが續いて天明十一年豊後大友軍勢に攻められた時の如きは神社寺院殆ど焼かれた。其後屢々戦争を行はれ其都度本村は兵燹に罹つたのである。

文明二年大内左京太夫義興卿は少貳次郎政資と合戦の際本村近津神社西の芝原を假陣として將卒皆近津宮の櫓を採つて甲冑に挿して進軍した等をも記録されて居て頗る兵戦の歴史が多いのである。想ふに本村は上古交通開けざりし時代から崗港又は洞海湾より九州入りをなすの通路であつた關係から屢々兵戦を行はつた所であつたらう。

本村自治上に關しては記録尠なく詳細を知るを得ないが、現在の感田區は以前より一個の村であつたものらしく、頓野古記によると正徳三年(二百二十年の昔)諸事不勝手に付き公儀御詮議の上にて頓野村、上頓野村の二ヶ村に別ちた事を記載されて居る以來頓野、上頓野、感田の三ヶ村であつたのを明治二十二年町村制を施行するに當つて三ヶ村を合して頓野村と稱するに至つたものである。之より先天正の頃から頓野、

感田に各庄屋を置かれて支配をなして居たが、明治九年區劃改正にて戸長副戸長の任命あり處々に扱所を設け村事を掌らしめて居た。尙明治八年本村の戸數五九九戸、人口三一九七名であつたが現今の課査によると戸數八三三戸、人口四六〇三名を算して伸展せる事明らかである。大正十五年十月三十一日本村を解体して十一月一日直方町新入、下境、福地の四箇町村と合併して直方町と稱するに至つたのである。

今試みに明治八年本村の戸數人口其他を調査せしものを記せんに左の如し。

「感田」本村、浦の谷、宿口、前田、中、小路、尾城、高板、崎の峰後一二〇、潮井四、下田二二、遠浦一、野口二九、新出四、行常十一、以上百八十六戸、士族一僧一平民一八四戸、口數一〇三一、男五二六、女五〇五、醫術男四、筆學男一、農男二二六、女二五一、工男一二、商男二、女二、雜業男四四、女三一、雇人男二二、女二、田畑二百九町九反四畝十歩、石高二千八百七石四斗一升七合五勺、橋十三、池塘一一、牛一二〇、馬四六、舟一、學校一、生徒四六、男四三、女三

「上頓野」道目木三一、安入寺四六、本谷一五、養生寺一二、慶生寺八、藤田九二五、中村二四、山田八、牧一〇、小河内一一、柞木二、井手口一三、大上原七、以上二一八戸、士族一僧一平民二二三、人口一一四五、男五六九、女五七六、從者男二、醫術男一、農男二九八、女二七四、工男二〇、商男五、女三、雜業男三四、女三九、雇人男九、女二一、田畑九十町七反三畝十二歩石高千七百七十三石八斗三升、橋四、池一七、牛一二二、馬五六

「頓野」本村、小路、和田、河原、馬場、島、中、寺小路、後九〇、内ヶ磯一四、保木八、山方一三、戸原二

西尾一〇、出山二六、羽高二〇、四辻二、以上一八五戸士族三僧一平民一八一、人口二〇二一、男四九〇、女五三一、從者男一、醫術六、筆學男一、農男二二四、女二五六、工男八、商男一、雜業男四八、女二五、雇人男五、女一二、田畑百六十九町七反二畝十二歩、石高千八百二十八石八斗一升三合、橋八、池塘一七、牛一〇六、馬四七、人力車二、川漁舟一、學校一、生徒八三

土地變移考

日本紀に神武天皇筑紫に御幸し筑紫之岡田宮に座し賜ふこあり岡田の宮は即ち遠賀郡青屋町にして、夫より船を水門に進め賜ふたこあるに據れば即ち遠賀川流域中間町、木屋瀬町、本村に入海をなして居たものと想はれ、木屋瀬町から本村感田裏は海岸であつた事を證據立てるに充分なる木屋瀬町に浪打、渡牟田、長浦、島廻、船越の地名を存し現に前年耕地整理の際地中から幾多牡蠣殻や貝類を發掘した事から見ても明かである。之に連續して本村感田に浦ノ谷、行合浦、湯之浦、遠浦、井牟田、山ノ浦、鴨ヶ浦の地名を遺し地下から海産物を掘り出した事のあるから見ても海であつた事を想像される。又一説には本村内ヶ磯は入海の最後の磯であつたとも謂ふが果して如何は斷し難いのである。

地名考 三代實錄及び白鳳延喜以來の社藏文書に鳥野神或は鳥野神社とあるあり考るに天孫御巡幸の時供奉の保食神福知山に駐まり給ふ事の不得止事情ありて主従の間に悲憂歎惜し給ひしより地方一帯を憂野と云ひしを萬葉假名を以て同音鳥野に移し而して天孫駐幸の頓丘(ひたな)の名を漢字流行後字形上訛傳して鳥野となり、頓丘(ひたな)は音讀上(さん)なり遂に湊合して今の頓野となれるならん。

土木 池塘 小河内堤は天祿十五年、善明堤寛文六年、通り谷堤寛文四年、寺の下堤天保十五年、會下の堤享保十年、小野牟田堤寛文三年、櫻田堤文化十四年、多々羅谷堤文化五年、宮ノ下堤慶應二年、沙井川堤

明和九年の築堤であつて其他は不明である。

尺岳川 は往時出水の度毎に氾濫して被害を蒙るより慶應三年村内協議の上郡内十八ヶ町村人夫約三百名惣出して以前は尺岳川はくるみ橋下手から直線に王子神社下を流れて居たのを一日の内に現在の水流に變更したもので爾來甚だしき被害を見ない。

位置、境界

本村は鞍手郡の東部に位し東西一里二十九町三十一間、南北二十五町餘、全面積一方里六七で内田地五百五十四町餘、畑百八十八町五、其他六百八十九町餘である。福岡縣廳への道程十三里餘で東は企救郡西谷村並に田川郡上野村に、南は本郡福智、下境兩村に境し西は遠賀川を距て直方町、新入村に對し北は本郡木屋瀬町に接して居る

地勢、區劃

本村の東部に福智連山巍然として聳へ南部、中央部、北部に福智支脈小丘をなして西に走る。其他は概ね平坦で土地肥沃にして農作に適す、近津川は上頓野安入寺から

發して村の中央を貫いて遠賀川に注ぎ、尺岳川は上頓野藤田丸を源として村の北部を西に流れて遠賀川に入る。又本村西部に岡森用水路南北に貫通して灌溉に供せられて居る。區劃は上頓野、頓野、感田の三大字に別ち左の小字がある。

「上頓野」本谷自一至十一 正支、定地、的場、神出、大早、御立處、牧、上川原、井手、新井手、宮の前、門口、山田、島田、小河内、岩鼻、梅ノ木、古屋敷、杵ノ木、山田、鬼出、通谷、内屋敷、寺ノ下、溝口、中原、大人田、三本松、四十塚、笹尾、龍ノ下、小山下、市場、西ノ宮、總美、道目木、曲田、徳ノ丸、原前、川平、堂山、中田、深田、古屋園、祇園原、辻、桂生寺、後的場、吹矢田、安入寺、五反内、萩原、穴谷、養定寺、元取、屋敷田、奥山、藤田丸、樋懸、燕谷、松尾、八久保、畝分、川北、猿渡、八反田、城原

「頓野」上宮、大塔、雜野、高取、瀬々里、三軒家、二瀬、下久保、二瀬、入道谷、大谷、烏泊、内ヶ磯、平田、塔尺郷、倉山、金山、白毛淵、推樂、柴野、南邊良、山田、不動口、會下、谷、畑辻、保木、白杵、澤馬場、小路、目元、北田、原、三本松、四十塚、横道、中原、鳥越、小家久保、鯉ヶ阪、龜倉、十堂、友次、室屋上、後口、和田、島中、焼本尊、宮ノ前、鷗田、大藪、梨元、野添、貴船、山方、浦田、笹尾、芽場、羽高、俵石、三反田、八反半田、五田太、未國、高繩手、五反田、正堺、十石浮洲、蓼原、芝原、伐菰、堀江、出山、西ヶ崎、繩手下、西尾、小野半田、藤野、須之浦

「感田」横道、上山下、久保田、行常、是井、四ツ町、六田、稗田、一丁田、砂田、川野、野添、上原、八ツ辻、前田、西前田、宿ノ口、浦ノ谷、多々羅谷、栗林、中半田、行合浦、貴船阪、櫻田、湯之浦、遠浦、井半田、野口、山ノ浦、水町、若柳、小塚、常廣、賣柴、四反畑、永池、廣田、小原、清寶寺、林田、鴨ヶ浦、中川原、室木、籬子、彌尻、新出、高津、羽勢半田

地質、炭脈

本村の地質は東部の山地帯は概ね火成岩層をなし其他は水成岩層に屬して居る。本村に於ける炭脈は南北に走つて東に向つて傾斜して居るが或る方面では東西に走つて北に向つて傾斜せるものもある。炭層は三平太、四平太、高江の三層である。

行政、官衙

本村は明治十七年から村役場を頓野後口に設けられて居て其後二十三年同區字小路に移轉し明治二十七年現在の同區後口に新築移轉したもので大正十五年十一月一日合併後は村農會並に信用組合事務所に當てられたのである。

歴代村長

就任	退職	氏名
明治二十二年六月十一日	明治二十三年二月廿五日	香月新三郎
全 二十三年三月五日	全 二十四年	吉川四郎
全 二十四年七月六日	全 二十八年七月八日	津田壽七郎

助役

全 二十八年七月九日	全 三十二年九月十五日	全	帆足勝彦
全 三十二年九月十四日	全 三十六年三月廿五日	帆	本足勝藏
全 三十六年三月廿六日	全 三十七年十一月十一日	帆	足勝彦
全 三十七年十二月廿二日	全 四十二年一月十三日	全	全
全 四十二年一月十四日	大正二年一月十日	長	野利重
大正二年二月十日	全 六年二月九日	帆	足利勝彦
全 六年四月廿六日	全 十年四月九日	長	野利重
全 十年十一月三日	全 十四年九月十六日	香	月亮介
全 十四年十二月十八日	現任中		

明治二十二年六月十一日	明治二十五年四月三日	香月收藏
全 二十五年五月廿一日	全 二十六年九月廿日	渡邊儀七
全 二十六年九月三十日	全 三十年九月三十日	瀧田盛啓
全 三十年十月廿五日	全 三十一年四月一日	中村盛太郎
全 三十一年九月廿九日	全 三十三年一月廿一日	市村千代
全 三十三年二月二十一日	全 三十六年一月六日	長井瀧平
全 三十六年八月六日	全 三十七年十月十日	山本敏彦
全 三十八年二月四日	全 四十四年九月三日	香月亮介
全 四十四年九月四日	大正二年二月九日	長野重

大正二年三月七日 全 六年三月六日 山本敏彦
 全 六年四月六日 全 九年十月十一日 香月寛二
 全 九年十二月二十日 全 十四年十月一日 香月樂平
 全 十五年七月 日 現任中 上川虎吉

収入役

明治二十二年六月廿二日 明治二十三年六月二十日 渡邊時重
 全 二十三年六月廿七日 全 二十六年十月二日 長野利重
 全 二十六年十月二日 全 三十年十月三日 後藤安太郎
 全 三十年十月六日 全 三十三年一月六日 長井瀧平
 全 三十三年二月廿六日 全 三十六年七月廿六日 仲野秀雄
 全 三十六年七月廿七日 全 三十七年三月 中川宇次郎
 全 三十七年十一月十二日 全 三十八年 栗原宗郎
 全 三十八年 全 三十九年 香月亮介
 全 三十九年二月廿二日 全 四十年二月廿日 山長繁
 全 四十年四月廿九日 全 四十四年八月廿九日 岸田勝次
 全 四十四年十二月十六日 大正四年十二月十五日 全 六年二月十日 全 七年三月二十二日 全 七年三月廿八日 全 十一年三月廿八日 全 十一年三月卅一日

全十五年四月七日 現任中全

本村選出縣會議員 山本敏彦

本村選出郡會議員 吉川監十郎、香月悅藏、渡邊儀七郎、山長繁、帆足勝彦、渡邊正次郎

前村會議員 田丸富太郎、山近林、長野利重、香月貞次郎、山本敏彦、故瀧田久吉、山長繁、渡邊正次郎、阿部賢一郎、大野順藏、古井嘉平次、宮近土五郎、安田福藏、永富常吉、桃田小市、吉川監十郎、故武内善作、古田良造、瓜生碩爾、石橋伸太郎

現村會議員 永富音吉、山長繁、瓜生碩爾、古田良造。中川千太郎、長野利重、安田福藏、山本半平、阿部賢一郎、大野順藏、橋宗太郎、渡邊正次郎

村農會總代 橋宗太郎、淺川常、行實鐵太郎、渡邊才次郎、山長繁、岐部大助、中川千太郎、香月傳藏、瀧田英雄、香月亮介、瓜生碩爾、渡邊正次郎、長野利重、有田岩吉、大野順藏、藤田幸太郎、古井嘉平次、大場太郎、永富音吉、安田平五郎、山本半平

區長 (頓野)許斐久米吉 (上頓野)中川千太郎 (感田)大野順藏 (役場吏員)書記武内高次郎、山本重雄、古田鐵雄、深見半次、村醫敷住、學校醫魚住友治、枝國雄八

頓野巡查駐在所 明治二十年七月廿日日本村頓野區後口に新設され全部を受持區域とされ三十七年増築した。大正七年感田駐在所を設けられて頓野區上頓野區の一部を受持區域とされるに至つたのである。

感田巡查駐在所 大正七年六月感田區字西前田に設けられ本村感田區一圓と上頓野區の一部を受持ちとされて居る。

交 通、 通 信

本村の交通としては遠賀郡黒崎町から嘉穂郡飯塚町に至る國道本村の西部遠賀川堤防を沿ふて日之出橋から直方町に至り、又日之出橋から本村中央を東に村役場前に至る縣道あり更に又日之出橋から木屋瀬町野面に至る線、日之出橋から役場前を経て上頓野に至る本通り、鑛山學校東から安入寺に至る中央線、感田より藤田丸に至る裏線、本通りから内ヶ磯に至る内ヶ磯線を幹線として其他里道縱横に通じて交通に遺憾なく通信としては直方郵便局の配達區内に屬して郵便受取所九ヶ所を設けられて居る。

教 育、 團 体

本村に於ける教育としては往時の事は詳かでないが明治七年篤志家香月新三郎氏が

資財を投じて設立せる眞香學舎あり上村丈平、岡山杏陰、月形悔堂の諸氏教授をなし遠賀、嘉穂、田川の各郡から學生の來るもの多かつたが普通教育の普及されると共に廢校された。

筑豊鑛山學校 筑豊鑛業組合立として本村西尾東に建築大正八年十二月開校した探鑛學、同分析、測量術、鑛山法律、土木工學、機械工學、制圖、電氣工學等主として鑛山に關する教授をなし本邦特別の學校とされて居る。校地一萬七千六十六坪、建物本館、講堂、寄宿舎、食堂其他附屬建物等約六百餘坪あり、設備としては探鑛學、機械、電氣工學に關する機械器具裝置の實物及模型各種を備へ實驗、實習用の機械數臺あり又石炭及瓦斯分析を主としたる設備鑛物、地質學用標本等一切其他測量に關する機械器具を備へ付けられ居る。目下鑛業不振の爲め本科別科共に在學生僅少なるも之が教授をなしつゝある講師は工學士六名、法學士一名、理學士一名、歩兵中佐一名技師其他二名である。

感田尋常高等小學校 明治七年學校設備をなし兒童の教授をなして居たが同九年小

學校令により本村前田に校舍教員假宅を新築し三ヶ年修業簡易科となした後現在の箇所に移し同二十二年本村野口に分教場を設けた。同二十四年四ヶ年修業に改め二十六年野口分教場を廢し合併した。三十二年、四十三年の二回新增築をなして六ヶ年修業とされた。大正四年校舍六教室を新築、同十二年高等小學校を併置、十四年四月農業公民學校(男子部)を設けられ十五年四月同女子部を併置され、同年七月青年訓練所を創設された。現在兒童四百二十六名學級六、高等科九十四名二學級、職員十名で教室九、裁縫室一である。

上頓野尋常小學校 明治九年小學校令によりて上頓野區出口に學校設備をなし兒童の教育をなして居た。同十九年川平に轉じ頓野小學校と分離した。同二十三年火災に罹り一時假校二ヶ所に分ちて教授をなして居た。同四十二年頓野小學校を合併して現在の道目木に新築移轉して尋常小學校として六ヶ年修業になした。翌四十三年九月建築全く落成した。大正十四年五月男子農業公民學校を、翌十五年女子農業公民學校を設けられ續いて同年七月青年訓練所を設置された。現在兒童三百六十三名、公民學校

生徒男四十三、女四十九名で青年訓練所六十四名である。之が職員七名、公民學校助教一名。

在郷軍人分會 明治四十二年頓野村在郷軍人團を組織し同四十四年三月規則を改正して在郷軍人分會と改稱した。現在會員は三百三十九名之を三支會に分つ。事業としては出征軍人の慰問、戰病死者の追悼、精神修養、軍事動作練習等、會長川上虎吉氏

尙武會 明治三十八年組織され同四十年並に大正十四年規則の訂正をなした。事業としては陸海志願兵の獎勵と入退營者送迎並に稿軍接待である。

青年會 大正四年二月之が發會をなし、同八年規則の一部變更をして現在に至る。會員三百十二名で上頓野、頓野、感田の三支會に別ち支會長を置いて居る。事業としては体育、娛樂、壯丁の豫習教育、夜學、奉仕作業、農事練習等である。會長香月亮介氏。

處女會 大正十年の創立で會員百二十餘名を有し之を學校區域に分ちて二支部として居る。事業は講習、修養會、敬老會、隨時奉仕作業をなして居る。會長西學校長。

消防組 明治維新頃迄は各所に火消組を組織されて居たが明治十七八年頃頓野、尺岳、感田消防組を設置されて居たが明治四十二年村内消防組を統一して、公設消防組の組織をなして機械器具を新調して設備を整へた。現在組員三百三十餘名で内小頭部長三名である。設置當時から引續き組頭山本敏彦氏。

教育會 明治四十年發會した會の目的は、教育の改善、社會風俗の惡弊を矯正するので主として教育に關する獎勵を事業として居る。會長長野利重氏、副會長香月樂平氏。

村農會 明治二十八年に組織されて同三十二年農會令により組織を變更した。爾來専ら農産物の獎勵に努め各種品評會を催し又は講習會を開いて指導をなし、一面副産物の獎勵にも力を臻しつゝあるが、現在會員六百餘名で會長長野利重、副會長香月樂平氏。

信用組合 信用組合有志者の發起にて上川助役主として幹旋し之が組織中である。出資は一口二十圓にて五百口を以て組織するの豫定である、將來は農業倉庫、利用組

合組織となすべき計劃ある由にて頗る有望である。

産業組合 大正十三年組織され年月経過僅かなるも、目下組合員二十二名を有し、稚鷺共同飼育所を設け極力事業の伸展擴張に努めつゝあつて本年の製繭七十餘貫にして價格約五百圓であつたが、年々産額増加を書り本村に於ける重要物産とならん。

苗木組合 苗木組合明治二十七年同業者相畫つて事業の改良發展を期して組織された越て明治四十一年規約を設けて組合となしたが、事情によりて大正十三年解散した

産物、名産

苗木 本村産物中の屈指である目下杉山植三百萬同一二年生千百萬、松山植百萬、同一年生三百萬、檜山植五十萬、同一二年生四百萬、其他樺楠三十餘萬の苗木を有して居るが、一ヶ年の收入優に二萬圓に上る由である。

植木 近年苗木の需用減少しつゝあるので數年前から植木の植栽をなしつゝあるが大坂流庭木を植栽し目下頻りに之が研究をされて居る。年産額五千圓を越へて居ると

木炭 本村内ヶ磯並に上頓野にて製造されて居る。内ヶ磯は文化十三年頃から創業したものである。一ヶ年の産額は金六千四百圓位に達して居る。

果實 本村に於ける果實としては、蜜柑を主として柿、梨、梅、桃等を産して居るが産額僅少にして一ヶ年の賣上額約九百圓内外なりと。

石材 本村内ヶ磯に産す明治維新頃は採石して營業となす者があつたが、其後途絶して居たのを三四年前より復興して、鳥居其他の注文各地から來るの盛況に向ひつゝある。

木材 本村下頓野内ヶ磯より産出しつゝあるが、年額五萬圓を越ゆる由。

八藏燒 慶長十九年國主黒田長政朝鮮を征して歸る時、鮮人歸化す名を八藏と改む又加藤清正の歸化人名を新九郎と改む、共に高麗章登の人なり、八藏は新九郎の婿なるを以て長政新九郎を肥後より筑前に招く、八藏新九郎共に陶法に巧であつた、八藏は本村内ヶ磯に窯を築きて燒物を作る。八藏燒と稱し其地を窯の尾と稱して地名に存して居る。

金山 本村大字頓野に金山の地名あり。往時金屬銅を産出せし故其稱ありと傳ふ。

礦 業

本村に於ける礦業に關する記録並に傳説がないので往時の事は知るを得ないが、明治十年頃は本村横坂に狸堀にて石炭の採掘をなして薪料に供して居た事は老人の實話であるが、其後香月半七氏龍の下に開坑せるも事業振はず。越へて明治二十三年礦業家井上勇太氏が本村上頓野大城原に坑口を開鑿して機械を据付け炭坑としての設備をなして採掘をなしたが、同三十九年廢業した。又吉村治四郎氏、本村四十塚に坑口を開鑿して明治二十九年から石炭採掘に従事し一時は事業盛大であつたが炭況不振の爲め遂に休業のやむなきに至つた。大正十二年の交藤藤十郎氏其跡を開堀し、坑口より頓野區友次迄運炭線を布設し一時盛に採掘せしも、其後廢坑したり、尙本村には三菱の大會社並に礦業家中野氏が大礦區を買收所有されて居るが近く礦業復興の時は大炭坑を設けられる事は明かである。

神社寺院

二〇

鳥野神社 本村内ヶ磯にある祭神。保食大神、天照大神、月讀大神の三柱に應神天皇、軻遇槌神を配祀して居る。古來から福地三所の神宮と云ひ福智山嶺に上宮山腹内ヶ磯に本社山下溪畔外山田に下宮ありしを、明治三十九年鳥野神社と稱し、大正十三年改築した。舊記によると神代の昔天孫瓊々杵尊日向國高千穂峰に座ます時、本朝衣食の玄靈保良大神の洪徳に感せられ、勅願を發して猿田猿女の二神をして其本地を尋ねしめて當山に鎮祭せしめ給ひしに濫賜すとある。又白鳳年中太宰師栗隈王及び釋教順相共に靈夢に感じ神威を畏れて朝廷に奏し祠殿を復興し、英彦山竈門山と共に西海鎮護の靈社たるの繪旨を下さる。又傳教大師は求法を祈りて山中に大塔を建て其地を大塔と云ふ。弘法大師鐘樓を築き其地を弘法鐘樓と云ふ。勅使僧大安寺一如來錫して聖朝安靜を祈る其地を聖の塔と云ひ、弘安四年幕府の命を承けて異賊降伏を祈らしめ、元弘三年戰捷祈禱の繪旨ある等願る由緒の深い神社である。

日本書記に天津彦火瓊々杵尊降到於日向樓日高千穂之峰而脅突胸副國自頓丘上竟國行云々、又頓野右記に福智權現。上宮豊筑境に其社跡あり、但し戌亥の柱筑前の内昔大伽藍也十月一日晚より豊筑人民群衆社職豊前上野天臺宗山伏。正保二年内ヶ磯に勸請、慶安四年社地少し上に揚げ社殿建立、天和二年秋より御公儀より松杉永満寺畑山にて宿進する天保十五年八月三日英彦山主院八峯事行列は畧す供廻り山伏八百僧余御城下より爲御手當御郡代役所より清水良八殿入込み數日御滯泊とある。

福智山 は文武天皇大寶元年に修驗道の大祖神變大菩薩役大士の渡唐の時親しく分登り一山護法一切衆生の爲めに本地虚空藏菩薩並に十一面觀世音菩薩、將軍地藏菩薩を安置し給ひたる最も古き靈所である。此縁によりて大同元年弘法大師唐土から歸朝の時妙典の紐を解きて、密教の流布を祈り爲に鐘樓を築き給ふ。今其跡を弘法鐘樓といふ、延暦二十四年傳教大師御歸朝の時も又報謝の爲め、大塔を建立天臺教義を弘め給ふた。

八幡神社 本村上頓野字桂生寺にある祭神は、仲哀天皇、應神天皇、神功皇后の三

柱にして建武二年十二月雲取城主麻生出羽守遠長が豊前宇佐宮を勸請し、文和四年三月黒法師丸神祠を再造し其後頽破せしかば、康應二年二月麻生辰俊が再建したもので神殿にある鐘一口、永正五年源盛種同樹盛の二名が寄附せしもので、筑前風土記、頓野村古記録、福岡縣地理全誌等に記せり、寶物鏡は筑紫國造高岡清住が奉納したものである。

尺岳神社 本村尺嶽山上にある日本武尊、大山祇命、吉備武彦命の三神を祭れり、上宮は路けはしく老幼の輩參詣になやみありければ寛永七年山下慶生寺に、社を建て下宮として日本武尊、大己貴命、大歳神の三柱を座つて居た。頓野村古記に明暦元年今の下宮に鎮座十月七日祭禮神樂有り上宮より五十間山のへら遠賀郡香月村境目也古來より彦山峰入札所也とあり。その文に

日子山進峰開闢之地筑陽鳥野之釋迦岳者日域維一之聖境而釋尊影向之妙峰也往昔役小角鎮西修曆之際先到于此峰現是神苦行數旬焉後遂杖錫躋到住于日子山多年也故當山進峰必先始於釋迦岳而及福智葛城諸山是即役氏之遺去也矣右宣度行者講式之一章應需令敬寫畢、乙丑初秋天望日 傳燈大先達法印財石坊覺念

又尺岳宮傳記に 柳此尺岳筑陽無雙之名山而樹末久毛辱神靈三座之磐壘也列別日本武尊者魁偉端正之尊容而勇武仁智之天性也故人皇四十代元武天皇御宇田道命苗裔高岡清住創建此社矣、于時白鳳三年十月辰辰大宮司奉

祀とあり鎮西筑紫之前州鞍手郡頓野之上村尺嶽權現者大山祇神景行天皇白鳥明神也、就中大山祇神者白鳥明神前身歸依之大神也、蒙此神之冥助而夙誅筑紫之豪賊熊襲矣、故是以白鳳三甲戌十月七日明神之使臣小狹田彦奉命而勅筑紫國造道命後裔高岡清住以被令社殿建立于山上焉、是即尺岳權現社之創立也。其源甚だ古いのである尙古記に尺岳下宮は村の西にあり今は西宮と云ふ惠比須神を祭る祭禮殊に盛で今宮に市場幟立の地名あり社の北に川あり、これを汐井川と云ふ御汐井神幸ありし故あり社の西に鳥越へ云ふ所あり昔鳥野村へ往來せし道路也寛永七年八幡宮境に社を建て移す此の尺岳下宮と稱す云々

近津神社 本村頓野西尾の東にある祭神伊弉諾尊、伊弉丹尊、軻遇槌命、事代主神である御三社權現傳に曰く近津權現社上古高津宮中古千勝宮と稱號す又舊記に當社原濫觴乾伸開闢之時に於て菰波二神彦山御垂跡の葦鳥莖高津の門に天降給志賀高穴穗宮天皇朝依御示現筑紫國造麿始而高津小野宮造立給御靈代者二尊御神傳之窰玉二丸及御鏡にして國造護身御銚別之今洲の浦高津森也とある。尙持統帝御宇太宰總領二莖太郎王令國人寶殿復興故に三莖權現共號奉る聖武帝天平九年春太宰大貳藤原宇合卿依靈驗宮城を改龜倉岡黄金御神體納此地、社御改造治國安民祈願所と御宣旨賜云々、今の社地を十堂と云ふ地内小丘を古來龜倉岡と稱す昔時地主の近津宮ありしを天平九年高津小野宮を此龜倉山に遷し合祭すと尙天慶の頃優婆塞某彌陀の尊像を得るに及び地頭笹川

右近宮に訴へ七堂伽藍を築き兩部とすとある慶長元年雷火にて社殿焼失寛文十三年再建し越へて享保年間に再興した其後大正十四年神殿拜殿共に新築した。

王子神社 本村威田にある祭神は正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、天津彦根命、天津菩日命、熊野久須日命、活津彦命、多紀理姫命、市杵島姫命、多紀津姫命である由來によると神功皇后の朝隨臣阿雲麿(阿曇)神威に感じ勅を承て松珂宮を創立し飼雁料田を充てらる(松珂宮跡は今の阿高神社附近)然るに貞觀の御遷座によりて今の社地八辻岡に移り王子松隈宮と稱す、貞觀元年神職水田氏神宜を蒙り社地を八辻岡に相して伽藍を興立す。天文十一年大友軍勢乱入社寺悉く兵燹に罹る此時猿群をなして神輿を奉し林中に隠す永祿六年赤隈山に假殿す又大同年中弘法大師神異に感じ崇て天臺守護神と仰ぎ寺塔を建つ塔浦、清寶寺等の名を遺して居た天文十一年兵燹に罹り天正九年再興延寶六年再建した。一説に貞觀元年二月朔日藤多麿に神託あり初て祭るともある。

西尾神社 本村頓野宮西尾にある祭神は素盞鳴尊、軻遇槌尊であつて其縁起詳かでない明治四十二年三月西尾疫神社と同所山長氏鎮守の雷神社を合祀したものである。

日吉天満神社 本村頓野字小路にある祭神は菅原神と大山咋命、伊弉諾命、大己貴神であつて正保元年奉行櫛橋十郎兵衛氏が社地を寄附し建立したものであると

熊野神社 本村頓野出山にある事解男命、伊弉丹命速王男命を祭る。延文五年十一月永富善右衛門尉吉教が紀州熊野宮を勸請したもので正徳年間に再建したものである

羽高神社 本村頓野羽高にある祭神天照皇大神で昔多田滿仲公軍勢を率ひ此地の高丘に上り天神地祇に遙拜ありて軍利を祈らせらる此時此高丘の上に數多の旌旗を高く建て列ねたり部落を旗高と云ふ滿仲公の旗章を以て神体と仰奉ると傳へらる。

愛宕神社 本村威田山野浦にある祭神伊弉諾尊であるが何時の頃勸請せしかは明でないが二三百年以前ならんと傳へらる祭日は例年五月一日に執行されて居る。

龍神社 本村安入寺本谷にある關山祇神

關靈神 罔象女命を祭り奉り側にある瀧の左右の山を龍の神と云ひ傳へ今より三百五十年餘の昔祠りものと傳説されて居る

秋葉神社 本村養生寺にある祭神火産靈命、軻遇槌神である寛政七年十月本郡直方町外町中島徳八、犬塚善藏が本村清水山に勸請したもので三月八日、十月八日祭典。

阿高神社 本村感田前田にある素盞鳴尊、保食神を祀る縁起に曰く延徳二年洪水の際豊前田川郡阿高村の神祠邑の西方新出の島に漂着し給ひしかば御社を創立せりと。

蛭子社 本村頓野出山並に同小路及び上頓野道目木に祀る蛭子神社は毎年十一月三日祭典を行ひ御座を開蒔し又御神体を擔き廻る習慣がありて賑合ふ。

合祀 頓野區日吉神社、現人神社は明治四十三年日吉天満神に貴船神社は同時近津神社に須賀神社は村社に稻荷神社は小路天満神社境内に水神社は熊野神社に移し又は合祀した。感田區の行常、野添、湯の浦、浦の木、鳴ヶ浦、雛子、羽勢牟田、八辻にあつた各貴船神社は明治四十年七月王子神社境内須賀神社に合祀した今は武富神社と稱す。白峯神社、水神社、疫神社、下田神社は四十三年王子宮境内天神社に合祀す。

淨福寺 本村感田にある。眞宗西派に屬し本尊は、安阿彌作の阿彌陀佛を安置し、同寺本源は禪宗にて昔本村大木園にあつて大福寺と稱して居たのである。後柏原院御字永正年間に肥前龍造寺隆信の孫有田氏本縣黒崎町に來り、花尾城主麻生氏に仕へて居たが、麻生氏沒落後出家遁世して乘雲と號し、本村に來りて、大福寺の廢寺となり

しを再興して親鸞聖人の勸軌を慕ひ龍谷本願寺支派に就き西派中本山攝津國島下郡日垣村佛照寺に屬して小本山として十二ヶ寺の末寺を領した則ち光福寺、圓覺寺、照專寺、長泉寺、萬福寺、眞教寺、西徳寺、教善寺、法泉寺、善定寺、教念寺、淨念寺等である。正親町院御宇慶長十四年寺號木佛を許された。大正十三年本殿庫裡共に新築された。

光明寺 本村頓野にある淨土宗智恩院末で開山は專運社念譽上人で開基は舌間與右左門宗善である。昔は天臺宗の禪場であつた。本尊は傳教大師作の藥師如來を安置し往時は寺運頗る隆盛であつた。天正年間兵燹に罹りた、後年一草庵のみ残して居た。元和の頃念譽上人瑞夢を蒙り彌陀尊像を奉して再び此地に伽藍を建立し。爾來念佛道場となつた。尙天臺時代の本尊藥師如來は境内に堂宇を建て奉安す裏山に多田滿仲の墓がある。

萬福寺 本村上頓野にある本派本願寺派に屬して慈雲山と號し本村感田淨福寺の末で寛永年中西圓と稱する僧が開基したものであつて、寛文二年に木佛寺號を許された

のである。御堂は寶曆十一年と天保十年に再建されたが、何時の頃か回録に罹つて諸記録を烏有にしたので、其縁起を詳かにしないが、當主は開基から十二世に當つて居る。

大聖院 本村感田にある眞言宗で本尊は十一面觀世音菩薩で至徳二年仁聞菩薩の御作である。其由來を聞くには豊後國杵築城主源重幸が天下泰平國家安全諸願成就の氏神八幡宮の御神体として約五百年間神と崇められたのである。同院は昔杵築城主稻葉氏が鬼門除けの爲めに建立祠りしものを大正四年本村感田瓜生松次郎氏が本村に移して安置したのである。大正八年火災に罹り同年再建したものである。

藥師如來 田高板山にある。本尊藥師如來並に四天王十二神あり、天明の頃は林雪といふ僧之を守れりと云ふ。古老の説に湯の浦より移せしものにて湯の藥師とも稱ふと。

大日如來 本村頓野出山に古代から安置され居るも其縁起明かでない。

彌勒菩薩 本村安入寺にある年代は明でないが、約三百年の昔同所安田家一族の祖

先を祀つたものであると云ひ傳へられて居る。

藥師如來 本村頓野出山にある。其由來全く不明であるが、堂宇境内にある古木から見ても餘程古いものである事を想像させるが靈現あり參詣人が多いと。

不動堂 感田中路にある。天明の頃山伏不動院守りしが今は本堂護摩堂もなし。

地藏堂 感田赤隈山の北にある。椎の大木あり、感田十二景の一であつた。地藏堂の推時雨と稱するは即ちこれである。

大福寺跡 感田大木園にあり今觀音堂のみ残り昔は禪宗大伽藍なりしと。

觀音堂 頓野會下にあつた木屋瀬永源寺昔は此地にありしといふ。又其西に遊行寺趾として石塔を存して居る。

光明寺地藏 頓野光明寺裏にあり。古代のもので靈驗頗る現であるとして參詣多し。

名勝、古蹟

國見岩 福智山頂西九分の處にあり、高一丈幅二間此石上遠望よし、國中大津を眼

下見。

白毛淵 頓野内ヶ磯にある、尺岳の上院長五間幅二間深六尺ある。早年には光明寺の鐘を此淵に入るれば小鰻下流より上る事がある。其時は必ず降雨ありと傳説されて居る。

小塚 本村感田山之浦に小塚と稱する處に小さき野石を立て居れり、昔より由縁あるものと云ふも何等傳説を聞かない。

天狗岩 前平山東八分にあり、高三丈餘幅六尺、其上に尤も險なり。登るものなしと傳ふ。

本谷瀧 安入寺本谷にある。長三間幅四尺下に淵あり、水源は本谷から出近津川に入る。

雲取城址 安入寺雲取山にある。本丸跡百五十坪許なり。堀切の址少し残り。永祿天正の頃麻生鎮益が城なりと云ふ。

藤田丸墓 上頓野藤田丸御立城にある。麻生出羽守遠長が一子藤山麿が落城の際自

殺せる所にて其墓あり。高四尺幅二尺位の野石を立てありし由なるも今はなし。立腹観音として村人堂を建て祠る昔は靈驗著しく各所より木剣を上げるもの多かりしと。

四十塚 上頓野にあり地名を四十塚と云ふ。小山の頂に小石を積み。高二尺餘、周三丈側に小松茂り居りたる由傳へらるゝも今はその石散亂してなし。雲取城が落城の時遁れんとした婦女子四十名許りを無慘にも仆したる處にて其の墓なりと。

鷹取城址 本村と福地村との界の山上にある。平地十五間に十間ある、今も破瓦等出ず、正慶二年太宰小貳頼尙が築城せしもので、香月家記に天文四年十月十七日遠賀郡香月村畑の城主香月備前守則考多勢を以て永満寺表へ出張し鷹取の城を攻む。横谷主膳、香月和泉守、馬場山源太左衛門、尺岳を越て搦手から寄掛りければ城中防ぐに便なく、永満寺の惠門律師に頼んで和を乞ふて無事調ひ則考も軍を引入るある、天正の頃大友の旗下毛利兵部少輔鎮重在城し黒田長政入國の後改築して家臣毛利但馬守友信を入置る、慶長十一年友信嘉穂郡大隈の城に移りし後は、手塚孫太夫光重を置く元和元年廢城となつた。

池の谷 本村安入寺池の谷は往昔平家の一族が隠れ居りし處であつたと傳へられ、近年鐵鏡其他器物を發掘した事があつた、當時の遺物ならんと云ふ。

廢寺址六所 雲取山の麓に松原寺、空玄寺、慶生寺、安入寺、養生寺、龍徳庵など寺址あり、又安入寺址には大日聖天二堂がある。鳥野尺岳神社記に見ると前記の内慶生寺は康應二年二月宮之坊宥禪が建立せしものとある。他の寺院も同時代のものならんか。

感田城址 は感田中央にあり。今は墓地となる城尾、尾城(御城の訛傳か)城の越、槽下、御所の阪等の地名現残せり慶長年間(三百二十年前)衣笠久右工門景德が居城であつたが何時の頃か廢城となつたものである。

供次 (職立)本村頓野近津神社側にある。文明十七年秋、大内左京太夫義興卿、少貳次郎政資と勝野山合戦の時近津宮西の芝原に假陣をなす云々。此時大將以下重臣宮山榊の小枝を採て甲冑に挿し進軍せりと其地に大内の職を立つ故に職立と稱すと。的場 上頓野にある雲取城のありし頃、將卒射的の練習をなせし處なりしと云ふ。

大城原 天慶五年藤原純友叛して九州に下り暴威を振ふので源經基之を討伐の命を受け九州に入り本村に城を築きしもの、跡なりと云ふ。

後生阪 感田にある往昔大寺のありし所なりと傳ふ。大福寺屋敷前から宿の口鎌子の峰に至る間古墓多し。大寺繁榮の頃の墓所なりしが大福寺屋敷前の道を後生阪と云ふ。

藥王行常 松山の下から白土を出す早良郡西皿山の燒物に用ゆる藥土也。昔は本府に出したりしも今はなし唯村民磔を作るに用ふることありと。

どんどん 感田小野牟田池に養水仕掛けの爲の寛永年中是々井溜池より岩を開鑿して隧道を作り落差約三尺其水音どんどんと聞ゆ故にこの名あり。昔五月から六月にかけて此川に「はせ」といふ魚住み藩政時代は之を國主に献上して居たと云ふ。

滿仲公の墓 頓野光明寺の裏の丘にある。光明寺傳によると、朱雀帝の御宇藤原純友叛逆せし時多田滿仲公大將軍として追討され、本村に陣を張られし事ありしが之を征服し下民安堵し公の恩澤に服し芳恩の萬一を報ひんとして力を合せ高塔を築きしも

傳説、古事

本谷瀧 享保九年六月大旱あり、村民愁ひ驚いて社司に請ふて本村龍神社に雨乞ひの祈禱をなす。その終はらざる午の刻に至り瀧壺より白氣一條靡上て接大靈忽ち密雲大に起つて雨降る之にて小叢を立て六月十五日を祭日とすと古記にあり。又毎年村民雨を祈るに八幡宮の鏡を龍神社の瀧壺に浸す。此儀何の時かより始しとも知らず雨降る前瀧壺を見るに長五寸許りの鰻に似たるものが底より踊り瀧の水の落る邊水なき只潤ある岩の上を登るこのもの鰻に似てあらず、奇異のものなり。浸鐘の儀は社司の家に相傳あり、寛延三年六月雨降らず、郡奉行郡司の命にて龍神に參籠し雨を祈る其報賽として四郡戮力鳥居を建つ明和二年七月廿六日大風にて轉ず。其後再興すとある。

猿浮 本村感田麥隈山南の田の中にある。昔王子宮回録の際猿多く集まり神体を興に奉り之を昇いて此地に休め奉りし由にて小塚を立て居たりし由此の塚を崩したる時

其土蛙となりたりと傳へられ、今尙其土を動かせば腹痛起るといふ。

柴田丹兵衛の墓 感田宿の口にある碑銘に大道勇信士靈位享保十八年肥前島原柴田丹兵衛信勝とある。聞くに丹兵衛洪水の際瀬踏みして溺死せるものにて家來も殉死せし由にて其墓がある、鍔刀を供へ祀れば靈驗頗る多しと四時參詣者絶へず。

赤殿古墳 嘉永七年甲寅四月地主山長又三郎、此地を拓き田を設けたる時石櫃を掘り出す櫃中腐蝕せる刀ありしと、之は赤田麿在世中馬井卿の遺愛名刀を埋めしものか。

黄安觀音 本村感田行合浦の田圃の小池に一本の蓮生へ年々美しい蓮花が咲いて居たが、明治二十年頃其池を掘りしに蓮の根本に黄金の觀音佛の御頭あり、其像の口中から蓮の白根を吐き出して居たのを發掘し、誠に難有き事なりと自宅に持ち歸り祀りしが、大正五年之を大聖院に安置したが、惜しい事に大正八年の火災にて焼けた。

天 災

飢饉 享保十七年の大飢饉は全國を通じての大飢饉であつたが、本村の被害甚だし

く田作虫入り残らず腐り麥類も又不作にして、村民餓死する者多かりしと。

大旱魃 嘉永六年、享保九年、寛延三年、大二年に旱魃あり収穫悉無の事ありて村民困窮する事甚しかつた。殊に嘉永六年の大旱魃は甚だしく、大河水一滴もなく枯れたる位にて各所に水喧嘩を演じられたと。

大洪水 享保十七年、文政十一年、天保十一年、嘉永三年、明治二年、同二十四年大正十二年と屢々大洪水出で、農作物の被害は勿論田畑荒廢、堤防道路の欠潰人畜の死傷等ありたるが天保十一年の出水は古今無比と稱せられた位にて山川筋破損甚しと
凶作 嘉永二年、天保七年、明治三年は春以來雨天勝らにて根付跡度々出水して稻腐れ且つ蝗發生して刈入れなく村民食料に窮し他村より救助をうけし位なりと。

善行、孝子

渡邊善吉 本村威田の人小保正を勤めて居たが安永元年大保正に昇進した、管内各村が用水欠しき爲め困難しつゝあるを見て岡森用水堰の開鑿を企て全力を擧げて之が

工事に措据經營して安永六年竣工を告げ下境村外五ヶ村農民をして旱災の憂なからしめた翌七年潘賞に預つた其功績や實に偉大にして其名を永久不朽に傳ふべきである。

安田太右衛門 本村名産たる頓野苗木の栽培の元祖として産業上に貢献する處頗る多大であつた。享保三年山ノ口國有林の監督に拔擢せられ、文化十二年召されて其功勞を賞せられ翌十三年栽培せし杉扁柏の苗木を献上して國有山林野に移植すること十數町であつた國主嘉賞された没後明治十五年農商務省から追賞されて御紋章の盃を贈られ同四十三年銀盃を下賜された氏は享保三年杉扁柏の實蒔苗の方法を發見し爾來一意之が研究と實驗に熱中して遂に成功したのである。

庄吉 上頓野に生る老母に仕へて孝養厚く萬事を母の指揮に待ちて決して逆はず赤貧の内から老母の樂養萬端怠りなく勵んで寛政元年國主から米若干を賜はる。

文次 頓野組頭役を四十年勤め法令を能く守り農事に精力を盡した難澁者には心を添へ不心得者を諭し頗る質素にして百姓の本分を守る享保二年青銅を賜はり賞與さる
卯藏 庄屋に普請裁判役を兼ね心掛宜く勤勞ありて村内治る年々米五俵を賜はる。

儀八妻 穂波郡中益村庄屋太郎次の娘なり儀八に嫁して紡績の業は勿論耕作に勵んで村中の風俗を善化せしめたる等模範的の婦人として享保十八年青銅を賜はり賞す。
渡邊正臣 本村社八幡神社々掌なり祠掌就職後奉仕怠るなく傍ら郷黨子女の教化に意を用ひ盡瘁する事二十四年洵に奇特として明治四十三年縣知事之を表彰した又同年鞍手郡神職會長も紀念品を贈つて表彰した。

貝島嘉藏翁 安政三年本郡直方町永四郎氏の第四子として生れ礦山王貝島太助翁の末弟に當る生れながらにして天稟の風格を表はして偉貌眉宇に溢れた居た遂には礦業界に於ける唯一の天才として名實を賞賛されるに至つた。翁の家は赤貧であつて一家數人の糊口にも窮するの有様であつたので十四才の時慈母の手を離れて筑後四林寺の小僧となられた後柳河報恩寺に轉じたが、豪邁不羈にして敢へて他人の掣肘を受けなかつた。翁は思ふ處あり報恩寺を出て、米屋某家の養子となつたが尙之に甘んずる事を得ず各地を漂泊し轆轤落魄業を轉ずる事數回であつた且つ生死の間に出入した事も幾度かを知らぬのである。明治九年太助翁が本郡新入村にて獨立礦業を經營するに到

るや翁は歸つて其事業を助けた、翌十年には西南の役起つたので軍夫百長として官軍に従ふて縦横に活躍し、亂平らいで後家に歸つた、明治十二年太助翁に従ふて遠賀郡香月炭坑の採掘をなして精勵克く努むる所あり翌十三年宛かも年齢二十五歳に及び不幸にも眼病に罹つて終に其明を失ふに到つたのである。然れ共剛毅の資は毫も平生の志を枉屈せず却つて緻密の思慮と果敢の腦力とを修養して常に太助翁の股肱として其謀議に參畫した、明治十九年太助翁が本郡宮田町大之浦炭坑區を買收して之が開鑿に従ふや、設計企劃をなして之が經營に苦心慘憺到底尋常の人の想像すら及ばざるの大苦闘を續け克く難關重疊の間に處して之を突破するに至つた。然るに明治二十三四年の炭價騰落にて礦業振はず事業維持に頗る苦しんだ際、井上伯の知遇を得て巨萬の資を借り入るゝ事となり。翁は太助翁の親戚總代として下關に同行して伯に面し、親しく其意見を陳述する處があつたが、伯をして「君幸に盲目である専心斯業に従事さるべし大金の貸與である故、太助君の人物を信するに由るとは雖も又君を信する所以である」と言はしめたのは如何に翁が伯に信頼されて居たかを想はしめるに充分であ

る。

爾來太助翁の事業は隆々として盛運に向ひ植木炭坑々區を購入するや氏は坑長を兼ね指揮監督を怠らす次いで桐野、大谷の兩坑を經理し同二十九年選ばれて香月坑長となり難工事であつた排水工事を落成せしめ遂に完全なる大炭坑たらしむるに到つた。其間の艱難は踵を相接して迫り殆んど迎接に遑なかつたが、一度發しては挫折を知らざる翁の氣魄は遂に萬難を突破された。而も翁は活達強記爾も盲目の身を以て屢々坑内に入り指頭炭層を探り又は一本の杖にて炭層を叩いて其頭上脚下幾千丈の炭層を説明して事業の設計をなし學者技師をして往々顔色なからしめた事がある等實に礦業界に於ける天才といふも過言でない。

一面氏は血あり、涙あり、常に感化遷善に意を注ぎ明治三十一年二月福岡縣下三監獄から出獄する免囚百七十五名を自己が經營しつゝあつた香月炭坑に收容保護して之に職を興へ懇切に之等の改善指導に努力され、現に十數名の模範人物を出し、又有爲の材にして資なきものに學資を興へて勉學せしめしもの三十六名、其内すでに博士學

士となりしもの七名あり。其他貧困者を救助されたもの其數を知らぬ有様である。尙慈善公共の心厚く神社佛閣社會事業に對して金品を寄附せる事は、枚舉に遑ないのであるが、氏が多年社會公共に貢献された偉大の功績によつて、大正十年十月畏しくも縁綬章を御下賜されたのである。

大正二年本村西尾に豪壯の氣を吐ける殿堂を構へて、清風高月を友としつゝ、一面事業經營を劃されつゝあつたが、大正十五年春邸宅を福岡市に移された、翁の如き偉人が本村に縁を有されて居たのは本村無上の光榮といふべく、茲にその略歴を傳へて村誌の上に永久に其名を傳ふる所以である。

統 計

職業別戸數及人口調

業 別

戸 數

七五五戸

人 口

四、二六六人

四年中學直方分校幹事兼教授となり。十六年鞍手中學校長に任せられたが、翌十七年嘉穂郡書記に轉じ二十三年再び鞍手郡書記となり、職務に恪勤された。三十二年職を辭して頓野村長に就任、三十六年郡會議員に選出され參事會員に推され翌年頓野村長に再任され、三十八年郡農會議員、三十九年郡會議員に再選し、四十二年續いて頓野村長に再任した。越へて大正六年頓野村長に擧げられ村事を執掌する事前後十六ヶ年であつた。其間日之出橋の架橋、學校の施設、耕地整理、納税の革新等に盡力された其功績や大なるものがある。日露役の功にて勳八等に叙せられた。惜しい哉大正十一年十二月遂に永眠された。

先村長

長野利重氏

明治元年本村中野家に生れ、後長野家に入る。同二十二年役場書記を拜命し翌年收入役に擧げられ、三十年區長に三十一年直方町外十一ヶ町村學校組合收入役に三十五年區長に再選し三十六年村會議員に當選す。四十三年道目木外三字五町歩開墾を發起し

委員長となり、四十四年本村助役大正二年村長、六年學校組合會議員、村會議員再選十年村長に再任する等三十有餘年間本村伸展と地方公共に盡瘁した。特に納税の改革を畫り組合を組織し學校建築をなして家事を奨励し内ヶ磯、中央、野面三大線道路の新設更正をなし、又大正二年の大旱魃に鑑みて堂山、中田兩溜池の増築々堤をなし同十二年六月の大洪水被害復舊等の各事業に寢食を忘れて盡力された。尙氏は同年簡易保險の奨励をなし、熊本管内にて最好成績を擧げ、自作農奨励資金を借入れた等、其功勞や實に多大であつた。

現村長

勳八等 香月亮介氏

慶應三年十一月本村に生る、明治十八年小學校教員を拜命して教鞭を執る事數年にして辭した。二十三年本縣遠賀郡底井野村下大隈炭坑の經營をなしたのを振り出しとして礦業界に活躍する事十餘年間であつた。三十七年收入役に選まれ。本村の財政上に盡し翌三十八年助役に擧げられ當時亂雜せる本村政の革新に努め、又日露戰役中であ

つたので、國債募集事務に従事して奮勵し、優良の成績を挙げた其功にて勳八等に叙せられた。越へて大正十四年臨時村長に推され續いて十五年五月村長に就任して専ら村事を執掌し本村の發伸の爲め大に盡す處があつた。大正十五年春直方町外四ヶ町村合併の議起るや氏は本村を代表して其交渉の任に當つて、東奔西走精勵克く努力された結果、同年十一月合併を見るに至つた。其間に於ける氏の勞は實に多大なるものがある。

有志者 故松尾庄右衛門氏

弘化四年七月本村に生る、壯年の頃から組頭に推されて組合の爲めに奔走されて居たが、明治二十七年村會議員に選舉されて、村事上に盡す處があつた。同三十一年三十五年と相次いで議員に再選されて村事に努力する事實に三十年の久しきに亘つた。又三十年三十八年の二回區長代理に其他神社寺院總代、各種委員に擧げられて、公益に盡瘁された事が多い。且つ二十四年の大洪水の際の如き殆んど寢食を忘れて盡した。日

清日露戰役當時は區長在職中の事として出征軍人慰問、遺族救濟等に奔走された。本村は氏が多年公共に盡された其功勞に對して記念盃を贈り表彰した。大正十一年十一月永眠された。

有志者 故中川半六氏

嘉永四年九月十八日本村に生る、農業に従事し精勵され旁ら本村産業の獎勵に努められた。二十才の頃から組頭となり。明治二十二年町村制を施行さるゝや村會議員に選舉され、又二十八年再選されて村事に奔走した。本村に於ける諸般の施設上に盡す處があつた。一面尺岳消防組に力を臻し、又郡尙武會、赤十字社事業等も斡旋された。特に明治十二年本村大洪水の際は一意被害復舊と救濟に努力された等公共の爲めに盡力されたのである、赤十字社並に尙武會は氏の勞に對し謝狀を贈り且つ本村は氏が多年の功に對して記念盃を贈つた等功勞大であつた。大正八年三月遂に永眠された。

有志者 渡邊備七郎氏

安政三年四月十四日本村に生る、明治八年組頭となり、同十七年用懸となる續いて同二十二年區長となられて、前後三十餘年間區政の爲めに幹旋盡力された。又明治十三年感田村會議員に同十七年頓野村外二ヶ村々會議員に選出され、明治二十二年町村制施行第一回の村會議員に選舉され、爾來繼續同四十四年に至る間約三十一年間再選されて村議に列した。尙同三十六年郡會議員に選舉されて地方の爲め力を臻した。其他本村助役並に土木、學校建築、道路、農會等各委員、神社寺院總代として熱心本村事公益に盡された。其功績は實に多大である。本村は氏の多年の功勞に報いんとして記念盃を贈りた其外各方面からも感謝賞狀を贈られたもの多く氏は實に本村に於ける長老である。

有志者 阿部 健藏 氏

安政三年八月十五日本村に生る、幼少から地方各塾に入門して、和漢の學を修め傍ら家業の手助けをなして居た。明治初年組頭に擧げられて公共に盡し、又學務委員其他

各委員に推されて力を臻されつゝあつた。明治十二年華道東山流に入門し、家元千葉一清氏に就て其蘊奥を究めた。尙小野池畔氏に相して苑を授けられて、數英館と號した其他茶の湯禮儀作法及び書畫の道を學び造詣深いのである。爾來名利を他處にして専ら門下の指導養成に努めつゝあつたが、大正九年氏は獨得の技倆と獨創の妙技を後世に傳ふべく東山都古流と云ふ一派を創始して其奥義を究め風流三昧に耽られて居る

有志者 長井 瀧平 氏

安政三年八月二十一日本村に生る、二十四才にして土木用懸りとなり、大に恪勤する處があつた。明治三十年本村収入役に推され、次いで同三十三年助役に擧げられて、本村事務を掌つて精勵された。一面に明治三十八年村會議員に選舉され、其後大正二年再選されて村議に参加して盡された、又農會議員、區長、各委員、神社寺院總代に推されて、本村公益の爲めに奔走盡力された事は實に多とするのである。特に本村澤の溜池尻の岩石を開鑿して隧道を作り其他本村に於ける。土木事業の萬端に努力盡瘁

された事等氏が多年村事に盡された。その功績に對して本村は記念盃を贈つて表彰した。

有志者 香月久内氏

安政四年五月二十日本村瓜生家に生れた、後香月家に入つて、家業に精勵されつゝ、傍ら明治二十五年村會議員に選舉された。以來連續二十六ヶ年に亘る久しき間議員に再選されて村議に参加して克く村事に盡したが、其間村政上に貢献された事は頗る多いのである。其他區長代理、區長として多年區事を掌つて盡し且つ區の革新や整理の爲め東奔西走された。其勞も又大であつたのみならず、道路新設更正、學校増築等にも力を盡し、尙多年神社寺院總代に推されて之が新築又改築委員となつて盡され、其他各種委員に擧げられて本村公益の爲めに盡瘁された功は多大であつて、先年本村は氏の功勞に報いんとして記念品を贈つて表彰したのである。氏は本村に於ける長老とされて居る。

有志者 中川爲吉氏

安政六年七月六日本村に生る、幼少から農業に従事して奮勵しつゝ、あつた。傍ら苗木の植栽に精出して本村産業上に盡された且つ氏は三十四才の時から多年組長として組合の爲め奔走されたが殊に傳染病流行の際は本村に未だ傳染病院の設備ないに、かゝはらず患者の隔離、其手當上に大に意を注いで一般の模範とすべき働きをされたので郡長から表彰された。尙四十才の頃農會議員に擧げられ、大正元年頓野産米検査員となり、續いて同三年福岡縣産米検査員を拜命し現在に及ばれて居る。其他明治四十年苗木組合を組織して監事となり事業伸展に努めた。又神社寺院總代としても盡力された。

村農會總代 有田岩吉氏

萬延元年五月十八日本村上頓野に産聲を擧げた。農を家業として幼少の頃から之が手助けをなし大に業に勵まれた。明治十八年私設尺岳消防組の組織並に其諸般の設備に

奔走盡力される處があつて、同副組長に選ばれた。同三十年伍長に推されて組合の爲めに斡旋した。其他四十三年萬福寺建築委員、同年字道目木外三字五町歩開墾事業の委員、大正元年神社新築委員、翌二年堂山、中田兩溜池増築委員等に擧げられて區事並に公益の爲めに力を臻された結果、大正十三年衆望にて本村農會總代に選舉されて現に本村農産上に盡力されつゝ、一面には公共の爲めに奔走されつゝある。

八幡神社々掌 渡邊正臣氏

文久元年五月本村に生れた、明治十四年伊勢神宮敎院を出で、大阪神宮神風敎會に奉職して克く勵んで居た。同十八年父祖の業神職を繼いだ。その傍ら上頓野青年夜學會を組織して青年の指導獎學に努め、又婦女子の爲め裁縫稽古所を設けて良妻賢母を養成する事に努め或は試作田を設けて農事の奨勵をなしたのみならず、同二十三年本村小學校訓導となつて教鞭を執り兒童の教養に努むる事多年であつた。一面奉公義會を組織して出征軍人の慰問、遺族の扶助、社會改良に努力した等本村學事公益に貢献する

處多大であつた。大正四年鞍手郡長は氏に銀盃を贈りて功勞を表彰した。

有志者 永富常吉氏

文久二年二月本村に生る、農を業として努力された。明治二十二年衆望にて村會議員に選舉された。以來連續五期再選されて本村萬般に奔走盡力された事は實に三十年の久しきであつた。且つ區長代理、區長たる事前後二十年以上であつた。其間氏は大正三年遠賀川改修工事の行はるゝを利用して近津川堤防の増築をなし、又伐菰の悪田の埋立をなし、更に岡森用水路に石橋を架し、又鑛山學校の誘至、土地買収道路の新設等公益の爲めに力を臻された事大である。郡農會議員に選出されて地方産業に盡し尙岡森用水組合會議員、村農會議員に選舉されて斡旋した勞も決して少くないのである

有志者 永島辰次郎氏

文久二年八月十日本村に呱呱の聲を擧げた、幼時から農業に従事して、専ら精勵されて居た。明治二十四年組長に推されて組合萬端の事を斡旋し、又區會議員、同協議員

に擧げられて區事に奔走されて居たが、大正二年區長代理となられて、熱心區事に盡されたのである。其間に於て氏は、津田道路の更正や櫻田溜池の築堤や、王子神社の改築並に武富神社の建立等に大に力を臻された。一面氏は家業の旁ら明治三十年頃から華道東山流に入門して熱心其技を研きつゝあつたが、技倆大に上達して今は永樂庵一東と號して緋房に昇進されたのである。現に感田區に於ける古老として尙區事に盡力中である。

村農會總代

藤田 幸太郎氏

文久三年九月九日本村に生れた、幼少から農業に従事して大に業に勵み明治十八年尺岳消防組を組織するや同組の幹事となり、盡す所があつた。四十年家督を相續したが不幸にも一時家産傾かんとして居たのを氏は一意家業に精勵して家運の隆昌に努力して漸く今日を得たのは氏の勤勉の結果であるのみならず、氏は頗る孝心深く老父に仕へて孝養を怠らなかつたのは美談とすべきである。尙氏は二十四五歳の頃から伍長と

なりて組合の爲めに働き、又區會議員に選ばれて區事に奔走した。其他作中道の更正に努力し農作物品評會審査員、寺院總代等として公共の爲にも力を臻したのである。

前村會議員

田 丸富太郎氏

文久三年十二月二十日本村宮近家に生れ、明治十七年田丸家に入り、二十三歳にして家督を續がれた、氏は幼少から農業に努力される傍ら副業として苗木の植栽に頗る熱心され、明治三十年所有の櫛山を改造して杉木を植へ又川邊良、石田の磧圃地、荒蕪の地を開墾して良田となす等地方産業獎勵の爲めに貢献された。その努力は實に偉大なものがある。且つ苗木の進展を畫らんとして苗木組合を組織して理事に擧げられ専ら苗木業の發伸擴張に努められた。一面にも組合區事に幹旋される處があつた。大正十年村會議員に選舉されて村事に奔走された等實に氏は本村産業上の功勞者である。

前村會議員

勳七等 宮 近土五郎氏

慶應元年二月本村に生る、農業に精勵されて居たが、明治十九年近衛歩兵第三聯隊に

入營して克く軍務に勤め、明治二十一年度獨立射撃に優等射手として金色櫻花章を賜はり、同年除隊となり爾來一意家業に努力して居た。日清役に後備として召集され、關門守備の任に當り、任務中歩兵二等軍曹に任せられ、日露大戰には第一種國民軍として召集されて臺灣守備に當り、任務中歩兵軍曹に進みた功により勳七等に叙せられ、明治三十八年村會議員に選舉され連續大正十四年迄再選され、二十餘ヶ年本村に盡した殊に大正十二年大洪水の際土木委員として被害復舊に奔走し、其他組長區長村農會議員等公共に力を臻した。

有志者 正八位勳八等 故 林 勇 平 氏

慶應元年十一月本村に生る、明治十六年七月福岡師範學校を卒業して直方小學校訓導を拜命し、同十八年宮田小學校長に榮進したが、二十一年職を辭して東京へ遊學し、二十三年東京工手學校を卒業し、同年本縣廳土木課に奉職し忠實職務に獎勵されたが後久留米に轉じ同二十九年柳河土木管區事務所長に上進した。越へて同三十一年直方土

木管區事務所長に榮轉し爾來十七ヶ年間管區内に於ける國縣道河川に力を盡して、土木交通上に貢献された。又氏は明治二十五年本村會議員に選舉されて村事に力を臻した大正二年官を辭するに當り、技師に昇進し正八位勳八等に叙せらる。大正三年永眠された。

有志者 下 藤 梅 吉 氏

慶應二年七月五日本村に生る、明治二十二年鑛業家香月新三郎氏經營の炭坑に入つて事務長となつて之が經營の任に當り、後若松事務所主任となり大に手腕を振ふたが、同三十九年辭して家業の農に従事して専心之が發展に勵まれつゝ、現在に至られて居る一面氏は明治四十年産米改良審査員並に農事改良督勵委員となり、次いで學務委員に擧げられ現に本村學事に貢献されて居る。大正十一年感田區長に選ばれた。其他勤儉獎勵委員、區會議員、農會幹事等に推されて本村公共に盡されつゝある。大正十二年大洪水の際は區長として被害復舊の爲め努分し、又寺院新築に力を臻された。勞を多とするのである。

有志者

吉川 監十郎氏

明治二年二月二十五日本村吉川家に呱呱の聲を擧げたのである。氏は温健にして篤實の人で徳望あり、明治二十八年衆望によりて郡會議員に選出された。次いで同三十三年並に大正十年村會議員に選舉されて地方公益の爲めに奔走盡力する處があつた。其後村有志者は屢々村の進展發達の爲め氏に村長の職に就かん事を請ふたが、氏は堅く辭して入れられなかつた。然るに氏は表面その任に當るを欲しないが、内面からは常に村發展上に意を傾注して直接間接に公共の爲めに力を臻されつゝある其功績は決して尠くない。一面神社寺院總代に推されて熱心神佛に盡されつゝあるのは大に徳とする處である。

村農會議員總代

行實 鐵太郎氏

明治二年六月一日本村羽高に呱呱の聲を擧げたのである。幼時の頃から農業に従事して専心出精した。氏は家業の傍ら組長となり、又明治二十九年區會議員に選ばれた以

來區會が解散するに至る迄の間連続して議員に再選されて區事に奔走盡力した。又明治四十二年本村に公設消防組を組織されるや氏は、その組織以前から委員として東西走して大に盡す處があつた。組織後は小頭に擧げられ、本村消防上に力を臻した。尙氏は有志者と相圖つて居所の道路の更正や溜池の新築や公共に盡力された。又村農會總代、小作調停委員、神社總代等として村産業上に斡旋されつゝある。

有志者

香月 樂平氏

明治二年本郡香井田村後藤家に生れ、後香月家に入る月形悔堂、武谷氏に經史を學び後修猷館に入る、二十年福岡裁判所に奉職して登記事務を掌る。二十二年小學校教員檢定に應試して教鞭を執る事となつたが、中途辭して、礦業に従事し再び教員を拜命して教育事業に一身を献ぐる事多年であつた。大正九年本村助役に選ばれ村長を助けて本村三大路線の新設更正や大正十二年の大洪水の際の被害復舊の爲めに全力を擧げて盡瘁された勞を多とする。其後地方改善に没頭し各地に講演し、東京其他各地開催の協調

會に列席し斯道の爲めに努め亦多年郷土史實の研究をなし、古文書を涉獵し目下鞍手郡誌編纂に従事して大に努めた。氏は醉石と號して和漢の學に通じ地方屈指の藏書家である。

現村會議員

瓜生 碩爾氏

明治二年十月二十六日本郡古月村野中家に生れた。全二十二年上頓野小學校訓導を拜命して教鞭を執る事となつた。翌二十三年瓜生家に入つた。同二十六年同校々長に榮進した。三十一年福地小學校長に三十九年中泉小學校長となり、四十二年再び本村上頓野小學校長となり。一意兒童の教養に努め、傍ら青年婦女の指導に盡された。大正十年四月職を辭した。其時同校卒業生は氏が多年教育に盡された其功を謝恩すべく金員を贈つたが氏は之を出身學校の奨勵金に寄附したのは美舉である。大正十二年村會議員に選舉され十四年再選された。其他産米検査員、國勢調査員、農會幹事災害土木委員等村事公共に盡した事大である。特に神社建築委員として努力された其勞は甚だ多とする。

頓野神社々司

故 水 田 勳氏

明治三年一月本村に生れた、同十六年家督を繼がれて同十八年祠堂に任せられ、二十三年小學校訓導を拜命して専心兒童教育の爲めに精勵された。三十三年烏野神社が縣社に昇格するや社司に補せられた。爾來一意神威の發揚と神社殿改築とに全力を傾注された結果、大正十四年社殿改築落成を告げたが惜しい哉。氏は大正十五年五月一日永眠された。氏は夙に眞香熱に和漢學を修め、經史詩文に長じ書道にも通ず、歌道は香川景樹に學ぶ處があつた、青年團を組織して子弟の指導をなし、一面鞍手郡神職會支部理事、鞍手郡誌編纂委員として最も盡力された事は實に多大の功勞とされる。

前村會議員

香月 貞次郎氏

明治三年三月二十七日本村に生れた。幼少から家業である農を天職として、一意業に精勵されて、その發展に努力されつゝ、現在に及ばれて居る。明治二十五年組長に選ばれて組合の爲めに奔走したのを始めとして、本村學務委員、國勢調査員、勤儉奨勵委

員、神社總代等として本村公共の爲めに直接間接に盡力されつゝあるのみならず、大正二年區長代理に擧げられて區事に力を盡されて道路に衛生に學事に納税に力を盡されたのである。一面氏は家業の旁ら明治二十三年から東山流華道に入門し熱心研究の結果蘊奥を究めて稻香庵一眞と號して、専心門人の指導に力を盡されつゝある。

前村會議員

石橋 仲太郎氏

明治四年十月二十日本村に産聲を上げた。幼年時代から農業に従事して家業の發展に努力されつゝあつた。二十四五才の頃から組長に選ばれて組合の爲め奔走する事多年であつた。私設尺岳消防組を設置されるや、幹旋大いに勤めた。相次いで區會議員に擧げられて、多年區事の協議に參して力を盡された。又神社寺院總代としても盡す處があつた。大正十年五月村會議員選舉に候補者に推し立てられて當選した。爾來村會に列席して村事に奔走した、今や氏は産業に熱心して農業に出精される旁ら果樹の栽培に努力されつゝ一家の繁榮を畫り又村の伸展上にも盡されんとされて居る。

現村會議員

中川 千太郎氏

明治四年十二月本村に生れた。同二十八年組長となつて公共に奔走されたのが振り出しとして四十二年消防組小頭となり、次いで同四十四年消防組第一部長に進み、大正五年區長代理に同九年區長に擧げられて現在に及んで居る。其他勤儉獎勵委員、土地賃貸價格調査員、村農會議員等として村の爲めに力を盡された、のみならず氏は大正二年村會議員に當選して村議に參加し、十四年再選されて現に村事に奔走されて居る尙本村中央線と裏村道の更正と並に大正十二年の大洪水の際は氏は區長在職中であつたので、之が工事に盡す處頗る多かつた。又氏神社々殿改築に關しても努力された

學校 醫

枝 國雄氏

明治四年十二月佐賀縣下に呱呱の聲を擧げた。東京麻生中學校を出で、後東京醫學專門學校濟生舎に入つて明治二十五年同校を出た。其後東京並に大阪の各病院に入つて實地研鑽を重ねて大に其技倆を研いた。熊本縣廳衛生課檢疫醫其他各地官廳に奉職し

て手腕を揮ふ處があつた。大正十二年本村威田に醫院を開業して、氏は多年の研究と經驗とにより得たる獨得の技倆を以て専ら患者の診療に従事して精勵されつゝ、現在に至られて居る。同年五月本村學校醫を囑托されて本村兒童衛生に深く注意を傾注して兒童健康に貢献されつゝあるのである。

現村會議員

永 富 音 吉 氏

明治五年一月二十日本村に生る。少壯から農業に従事して出精されつゝ、二十才の頃から組長に推されて多年組合の爲めに奔走された。明治四十二年消防組を設置されるや小頭に擧げられた。次いで大正二年米穀検査員を拜命し、越へて同十二年本村産業發展を畫らんとし率先して養蠶の業を創め頓野稚蠶共同飼育所を設置する等大に蠶業獎勵に努力され翌十三年區長代理に擧げられて、區事の革新に努め其間日之出橋から出山並に羽高に通ずる道路更正に盡された、同十四年村會議員に選舉されて現在村事に盡力されつゝある。其他村農會總代、寺院總代、世話人として各方面に奔走されて居る。

頓野區長

許 斐 久 米 吉 氏

明治五年九月本村に生る、同二十六年組長となり、同二十九年區長となり、二期を續け同三十三年本村役場書記を拜命して、勸業係に勤務し忠實事務に恪勤して一意本村農事産業の獎勵に努力されたので、同三十六年鞍手郡長は特に氏の功を賞して金員を贈り表彰した。大正六年土木委員となり土木上に盡し、又明治四十二年消防組小頭となり、後部長に進む。其他國勢調査員、貸賃價格調査員、神社寺院總代、區長等として盡力中である。殊に大正十年の大洪水の際責任者として頓野上頓野兩區の被害復舊を完了し、且つ同十四年委員長となり、羽高に溜池を築きて稻田十五町歩の灌漑をなさしめた勞を多とす又本村農會幹事として盡瘁し表彰され近津神社新築にも献身的盡力されたのである。

縣會議員

勳八等 山 本 敏 彦 氏

明治五年九月本村に生る、同二十三年檢定試験に合格し、本郡下境小學校教員となり

教壇に立つて専心子女教育に努める事六ヶ年、同二十九年志を立て東京に遊學したが事情にて翌三十年歸郷し本縣嘉穂郡碓井村新白鶴炭坑の經營をなす事となつた。然るに事業意の如くならずして、同三十六年本村名譽助役に推された、日露役の功にて勳八等に叙せられた。四十年内務省遠賀川改修工事々務所に出仕し、四十三年村會議員に選舉され、大正元年再び助役となつた。同八年縣會議員に選出、同十二年再選縣參事會員に擧げられ現在に及んで居る。尙氏は四十二年消防組を組織されるや組頭に選ばれ又大正九年鞍手消防義會を組織して副會長に推され現任中である。又氏は本村外四ヶ町村合併の議起るや産婆役として日夜斡旋大に努め之が成立を見るは其勞を多とするのである。

現村會議員

安田 福藏氏

明治六年三月三日本村安入寺に呱呱の聲を擧げた、幼時から家業の農に従ふて精勵され専ら家運の隆昌に努力されつゝ現在に至られて居る。氏は壯年の頃から組長に選ば

れて一意組合員の爲めに東奔西走して盡す處があつた。而して明治四十二年消防組を設置されるや小頭に推されて多年本村消防上に盡された。尙大正十年四月村會議員選舉に候補者に推されて當選して村議に参加する事となり、村事に盡されつゝあつたが同十四年の選舉に再選されて現に本村並に公共の爲めに斡旋されて居る。其他産業の獎勵や、青年指導や、學事、交通上に關しても力を盡されたのである。

有志者

安田 初太郎氏

明治六年三月十五日日本村に生れた。幼時から農業に従事して出精された。同二十七年安入寺組長に推されて組員の爲め奔走盡力する處があつた。同三十年區會議員に擧げられ、同三十六年村會議員に選出されて續繼三期再選され越へて大正六年再び村會議員に選舉されて本村事に力を盡した事二十餘ヶ年であつた。又明治四十二年消防組組織されるや第一部長に選ばれた。尙同年區長代理に大正八年村農會議員に推された。其間氏は道路更正、架橋、産業獎勵等に盡力された、而して氏は明治二十二年並に同

二十四年の二回本村國有官林火災の際必死消火に努めた廉にて其筋から賞狀金員を贈られた。

有志者 故瀧田久吉氏

明治七年七月四日本村に生れた壯年の頃から組合の爲めに奔走盡力されて居た。明治三十八年區長代理に推され次いで區長になられて區事萬端に力を臻された事十五ヶ年であつたのみならず同三十六年村會議員に選舉された。以來約二十ヶ年に亘つて連續議員に選出されて村議に参加して熱心村事に盡す處があつた。且つ農會議員其他各種委員に擧げられて本村に於ける産業、學事、交通等に盡されたる其勞を多とするのである。又寺院、神社總代としても奔走されて居た等本村の爲め前途を有して居たが惜し哉、病の冒す處となつて大正十二年十一月十三日遂に永眠された。

現村會議員 山長 繁氏

明治七年九月七日本村に呱呱の聲を擧げた豊津中學校を出で、正木塾並に秦塾にて漢

學を修め同二十八年家督を相續して家事を掌る事となつた。同年本村役場書記となりて精勵する處があつて同三十一年村會議員に選舉された。爾來連續現在に至る間再選されて村治政の爲めに盡力された。次いで大正四年郡會議員に選出され同八年再選されて郡參事會員に擧げられた。又郡農會評議員、同副會長、村農會長、岡森用水組合會議員、遠賀川改修工事委員等に推されて社會諸般の事業に盡瘁された事頗る多とするのである。殊に大正十五年本村が直方町外三ヶ村と合併に際し氏は合併委員に擧げられて本村を代表して交渉の任に當り克く盡された其功勞や又大であつた。

有志者 勳七等 阿部 倫氏

明治八年一月十九日本村に生る、同二十七年歩兵第二十四聯隊に入營し一等軍曹に昇進し第三大隊本部附となりて臺灣に派遣され又日露役には朝鮮守備の任に當つて克く軍務に盡した功勞にて勳七等に叙せられた。之より先氏は明治三十一年除隊となり赤十字社鞍手郡分區事務員を奉職恪勤し同三十四年本村役場書記を拜命して勸業、兵事

係として職務に奮勵した。尙日露役凱旋後は三菱炭坑に入つて勤むる事數年にして辭して農事に従事し努力した。大正八年本村礦山學校に奉職して現在に至られて居る。又氏は入營中大隊書記に選拔され且つ地價改良の際委員を囑託されて盡す處があつた。

有志者

中川 宇次郎氏

明治八年九月十一日本村に生る、小學校卒業後折尾學校に修學し二十四年上頓野小學校教員を拜命して本村兒童の養育に盡し二十九年矯風會長に擧げられた。三十一年宗像郡赤間町にて清涼飲料水合名會社を組織し社長兼會計となりて經營し三十六年區會議員に當選して區事に奔走し同年本村收入役に選ばれて財政事務に精勵された。三十八年辭して四十一年小倉北方陸軍用達となりて大に活躍し大正四年消防組小頭となり後第一部長に進んだ。大正四年自宅にて清涼飲料水製造を創業し同六年植木町にて合名にて商業を創め大正十一年本村學務委員に擧げられて本村教育上に貢献されつゝある。

現村會議員

渡邊 正次郎氏

明治九年十月本郡若宮村勝木家に生る二十七年渡邊家に入つた。三十二年鞍手郡書記を拜命して精勤する事七ヶ年であつた。三十八年福岡縣書記に榮進して庶務課に勤め忠實職に勵んで其手腕を揮ふた四十三年職を辭して歸省した。四十三年村會議員に選擧されて連續五期を續けて現在に至られて居る。大正六年郡農會議員及び評議員に擧げられ同八年郡會議員に選擧されて郡參事會員に推された。同十二年鞍手郡財産組合會議員に當選した。其他鞍手郡農會特別議員、直方町外十一ヶ町村學校組合會議員、同學務委員、郡育英會及郡教育會評議員等に選擧推薦されて社會公共に献身的に盡力された其功勞や多大である。偶ま本村は直方町外三ヶ村と合併の議起るや合例委員に擧げられ全力を傾注して村に盡した勞や感謝すべきである。

有志者

正七位勳七等

岩 見 秀 吉氏

明治十年二月二日本村に生る同二十九年十月本村役場書記となつた當時龍岡郡長及び

本村課長の推薦により翌三十年鞍手郡役所に奉職し三十一年郡書記を拜命して記録、衛生、兵事、庶務の各係に勤務して職務に奮勵された結果大正六年七月鞍手郡庶務課長に榮進した爾來郡政の爲め一意努力された、十二年郡制廢止の際は特に氏は精勵されたが十四年一月官を辭して同年三月貝島礦業會社に入社し庶務係に勤務し現在に至られて居る。氏は明治三十七八年事件の功にて勳八等に大正三年勳七等に進み同十二年十二月正七位に昇叙せられた氏が約三十年本郡公共に貢献された功は多大である。

有志者

松野茂太郎氏

明治十一年三月八日本村に生れた二十九年明善館に入つて漢學を修め、三十二年五月本村上頓野小學校教員を拜命した、翌三十三年福岡師範學校講習科に入り歸任後同三十七年小學校專科教員となり越へて四十一年本村威田小學校に轉じた。四十三年東筑中學校臨時福岡縣小學校教員講習會に列した。大正八年三月再び上頓野尋常高等小學校に轉じて現在に及ばれて居る。其間二十八ヶ年に亘つて氏は兒童教育の爲めに奮闘

努力を續けて本村に於ける教育上の功勞者である。尙大正十四年農業公民學校助教諭翌十五年青年訓練所指導員を拜命して精勵中であるが國勢調査員としても盡された。

産米検査員

勳七等 永富太郎吉氏

明治十一年十月十九日本村に生れた、幼少から家業の農に従事して大に精勵された。三十一年下關要塞砲兵隊に入營して克く軍務に盡した、三十七年日露戦端を開かるゝや召集されて第三軍に従ひ出征して旅順攻撃に参加して陥落の最後に至る迄善戦したその功によつて勳七等に叙せられた。凱旗後は農業に熱心して現在に及ばれて居る。氏は本村在郷軍人分會支會長、消防組部長、國勢調査員等として社會公共に盡す處があつた。大正十二年十一月産米検査員を命せられて現任中である且つ氏は頗る農業熱心家であつて農作上に意を注いで之が改善、増收に努力されつゝある。

村農會議員

大場孫太郎氏

明治十一年十一月十五日本村に生る、明治四十年組長に推されて家業の傍ら組員の爲

めに奔走盡力する事十一ヶ年であつた。其後大正十二年再び組長となつて現に其職にあるが前後十五ヶ年以上である其間大正三年行常橋を架し道路の更正新設、納税、衛生等組合の爲め力を盡された。又消防組織當時から小頭に挙げられ消防上に盡した事十五ヶ年に達したので大正十四年同組から表彰された。大正十二年農會總代に挙げられて本村に於ける農事上に盡力されて居る。尙氏は家業の農に頗る勤勉して曾つて四郡品評會に粟を出品して受賞した其他立毛品評會等にも入賞した事がある。

前村會議員

勳八等

山 近

林 氏

明治十二年三月本郡吉川村に生る、三十三年小倉輜重隊に入營し、日露役に出征して功あり勳八等に叙せらる。鑛業家具島家本村に轉居せらるゝや、氏も居を本村に移して、業務の傍ら大正六年青年會支會長に擧げられて同十三年迄八ヶ年間の久しきに亘つて青年の指導をなすと共に之が力行を奨励し奉仕作業や各種稼業に従事せしめて督勵して同會に田五反歩及金七百圓餘を蓄積なさしめたる其勞や頗る大であるのみなら

ず大正十年村會議員選舉に選舉されて村議に参加して本村政上は勿論公共の爲めに直接間接盡瘁された功も決して尠くなごのふある。

村農會總代

淺 川

常 氏

明治十三年一月二日本村威田に生れた、幼少から一意家業の農に従事してよく精出されつゝ、現在に至られて居る。二十才の頃から本村青年共盛會長に擧げられて青年の爲めに斡旋盡力する事十數ヶ年の久しきに亘つた。明治四十二年公設消防組を組織されるや小頭に推されて翌四十三年に同第三部長に昇進されて唧筒の購入や消防上に奔走盡力する處があつたのを多とする。又威田區協議員として區事に力を臻し大正九年同十四年の二回國勢調査員に選ばれて努力された。尙大正十三年には衆望にて村農會總代に選舉された以來本村農産上に奔走盡力されつゝある。

現村會議員

山 本

半 平 氏

明治十三年二月十一日本村に生る、幼少から家業の農に従事して努力されて居る。同

四十二年本村に公設消防組を組織されるや創立委員となり奔走した。設置後は小頭に推された。大正十年部長に榮進し同十四年三月之を辭したが氏が消防上に斡旋盡力された事は十七ヶ年の久しきであつた。又納税組長、村農會議員、農會總代、區會議員國勢調査員、寺院世話人、神社總代等として本村公共に盡瘁された事多年であつたのみならず青年會長に選ばれて青年の指導施設の爲めに力を臻された。尙大正十四年五月村會議員選舉に候補に推されて當選し村議に参加して奔走盡力中である。

感田尋常高等小學校長 高 倉 洗 助 氏

明治十三年十一月二日本郡吉川村神谷家に生る後高倉家に入る、三十九年福岡師範學校を出で本郡勝野高等小學校訓導となり教鞭を執つたのを振り出しに下境尋常小學校直方高等小學校を経て、大正四年三月福地尋常小學校長に榮進した。翌五年劍尋常高等小學校長に轉じ越へて十三年西川尋常高等小學校長となり、十四年本村感田尋常高等小學校長となられた。同年農業公民學校長を兼任し十五年七月青年訓練所主事とな

つた。尙氏は鞍手郡教育會評議員に選ばれ郡教育上に盡されて居る。又本村兒童の教育に努力されて居る傍ら本村伸展の基礎である青年婦女の指導養成にも力を注がれて居る。

前村會議員 勳八等 古 井 嘉 平 次 氏

明治十三年十二月十八日本村に生る、三十四年輜重隊に入營した日露役に召集され第十二師團野戰隊に編入されて出征し各所の戰闘に参加して忠實に軍務に勵んだ其功によりて勳八等に叙せられた。凱旋後は家業の農に従事し傍ら材木業を兼營して一意事業の發展に精勤されつゝ今日に至られて居る。一面氏は壯年の頃から組長に擧げられて奔走盡力した。大正十年村會議員選舉に候補に推されて當選して村事に努力した次で村農會總代に選ばれて本村農事上にも盡されつゝある又氏子總代其他委員として斡旋する處があつたが目下専心事業の擴張の爲め努力を續けられて居る。

現村會議員 古 田 良 造 氏

明治十四年八月本村に生る、三十二年熊本縣立獸醫學校を卒業、本村に開業し、二市

三郡聯合獸醫組合副會長、郡獸醫組合長等に擧げられ、大正十四年本郡吉川外二ヶ村牛の肺疫流行の際防疫官を命ぜられた。一面明治四十二年學務委員となり連續三期間學事上に盡し大正十年村會議員に當選、十四年再選され村議に参加し、十二年區長に選ばれて、弊風を打破し區の改革を畫つた。其他青年會顧問、國勢調査員、勤儉獎勵委員近津神社氏子總代等に推され、又神社改築委員として奔走し、又消防組織當時小頭兼會計たる等公共に盡し十二年大洪水には區長として復舊に日夜奔走し、同五年本村電燈架設に盡力した。

収入役

栗原 豊助氏

明治十六年七月六日本村に呱呱の聲を擧げ、家業の手助けをなして居たが、四十四年八月本村役場書記となつて、稅務、戶籍事務を分掌して一意職務に恪勤された結果、大正七年三月本村收入役に選ばれ、農會々計をも兼ねて本村經濟上に盡す處大であつた。十一年三月再選されたが續いて同十五年に再任されて、三期間を繼續し本村事に力を臻さるる前後十六ヶ年である。又明治四十二年消防組を組織されるや小頭に推さ

れ後二部長に進み在職十ヶ年其他尙武會幹事、國勢調査係、神社總代として公共に盡す處があつた。殊に近津神社建築委員として氏が懸命に奔走して盡力された事は多とする。

前村會議員

桃田 小市氏

明治十七年四月廿六日本村に生れた。幼時は農業に従事して出精されて居たが、明治四十年頃から炭坑に勤めて奮勵した結果、本郡西川村古河礦業所新目尾炭坑納屋頭となり、次いで取締となつた。大正十年遠賀郡大島炭坑に轉じて、同坑の萬事を掌り同十二年嘉穂郡中島礦業所西ヶ浦炭坑の經營者をなして居た。其他帝國炭業會社經營炭坑の請負採掘をなす等礦業方面に活躍をなして居たが、同十五年本郡宮田村所田温泉場經營をなし専ら努力して居る。氏は區協議員、農會世話人等として盡されて居たが、大正十年五月村會議員選舉にて議員に當選して村議に参加して本村事に奔走盡力する處があつた。

現村會議員

阿部 賢一郎氏

明治十七年五月十五日日本村北村家に生れ、後阿部氏を名乗る。夙に佛學を研究して、体得された。一意家業に精勵して家運の隆昌に努む。四十二年區長に選ばれて區事に盡した。偶ま明治大帝御不例の報傳はるや、區民を擧つて御平癒の祈禱をなし、又御崩御あらせらるゝや謹慎哀悼の意を表して區民一切その赤心を捧げしめたる等實に他の模範とされて其筋より賞せられた。大正四年衆望にて村會議員に選舉され連續再選現に村事に貢献されつゝある。其他農會總代、神社寺院總代又曾つて消防組小頭、部長たりし事ありたる等公益に盡瘁した氏の如き名實兼備の人によりて、村發伸の爲め努力を待つのである。

助 役 勳八等 上 川 虎 吉 氏

明治十七年九月十五日日本村に生る、同三十七年歩兵第十四聯隊に入營し、克く軍務に精勵したので、四十年軍曹に榮進した。四十一年除隊となり。翌四十二年鞍手郡役所書記を拜命して學務、稅務、兵事の各係を歴任して職務に精勵され農商務主任に昇進したが、大正十五年郡役所廢止となつたので辭して同年七月本村助役となつた。一意村

事務に奮勵して居る。大正三年乃至七年事件の功勞によつて、勳八等に叙せられた。又氏は明治四十三年本村在郷軍人分會副會長に推され、越へて大正十年同分會長に擧げられ、多年本村に於ける在郷軍人會に盡す處あり。尙目下組織中である本村産業組合の設置に奔走盡力中である。

現村會議員 大 野 順 藏 氏

明治十八年三月二十八日本村に生れた。同四十二年本村消防組を設置されるや組頭に選ばれ次いで第三部長に昇進した、大正六年村會議員に選舉されて三期を連續して當選し現に村議に列して本村政上に貢献されつゝある。又學務委員、國勢調査員、賃貸價格調査員、小作調停委員、農會總代、神社寺院總代等に擧げられ尙現に感田區長として本村事區事公共の爲めに殆んど全身を擧げて盡瘁されつゝあるが、其功績も又大なるものがある。氏は議員中の年少にして氣鋭である。しかも前途を囑目されて居るが、本村伸展上に缺ぐべからざる人物で氏の奮闘努力を期待されて居る。

現村會議員

橋 宗 太 郎 氏

明治十八年十月一日本村に生れた。幼少から家業の農に従事して頗る精出されて居た。明治三十八年歩兵第十四聯隊に入營して克く軍務に勵んだ、除隊後は家業に復し専心業務に熱心して現在に至られて居る。氏は大正五年組長に推されて組合の爲めに奔走したのを始めとして村農會總代、國勢調査員、在郷軍人分會幹事、青年會長、神社總代、寺院副總代等として公益の爲めに盡す處があつた。殊に大正三年愛宕青年會を組織して會長に推され夜學會場の建設に盡力した。大正十四年五月村會議員選舉に候補に推されて當選し村議に参加して目下村事萬般に盡力中である。

有志者

岸 田 勝 次 氏

明治十八年十一月九日本村に生る、幼少の頃から家業の手助けをなしつゝ精勤された。同四十一年本村役場書記を拜命して土地稅務係に勤務して克く其職務に恪勤し、四十二年宅地價修正委員に選ばれ翌四十四年八月收入役に擧げられ本村財政上に盡す處が

あつて大正四年十二月再任されて一層村事に努力されつゝあつたが大正六年職を辭して福岡銀行直方支店に奉職して専心職務に出精する事約三ヶ年であつた。大正九年西尾貝島邸に入りて會計を掌つて現在に至られて居る。一面氏は明治四十二年消防組に加はり小頭に推され後に部長に進み又國勢調査員となりて公共にも盡力した。

庶務主任

武 内 高 次 郎

明治十九年八月八日本村に生る、四十四年八月本村役場書記を拜命して稅務係となつて頗る職務に恪勤した。大正七年兵事係に轉じて一層職務に出精される處があつて同十三年庶務主任に進みて本村事の要重事務を掌つて一意本村發展の爲めに努力されつゝあつた。偶ま大正十五年直方町外四ヶ町村と合併成らんとするや、氏は村勢調査や其準備に携つて奮勵大に努められた其勞や多とするのである、尙氏は明治四十二年消防組々織當初から小頭に擧げられて第一部長に昇進した。又大正三年青年會支會長となり青年指導に力を臻し且つ國勢調査員、勤儉獎勵委員、組長として盡された。

村 醫 數 住 源 氏

明治二十年十二月一日本村に産聲を上げた、氏は多年積まれた螢雪の功成つて大正二年四月醫師開業試験に合格したのである。而して同年本村にて醫院を開業して一般の診療をなして居た。同六年東京赤十字社病院にて皮膚科の研究をなし引續き九州帝國大學病院旭博士の下にて更に皮膚科の研鑽を究めた。其後八幡市其他に出張所を設けて大に業務の發展に努めつゝあつた。一面氏は内科を得意として居るが特に一般慢性疾患と肛門病に對しては獨得の手腕を有せられて居る。又氏は開業當時から本村醫を囑托されて現在に及びて本村の公衆衛生上に力を臻されつゝある。

學校醫 魚 住 友 治 氏

明治二十一年二月十五日日本縣田川郡赤村に生る、大正二年熊本醫學專門學校を卒業して熊本縣立病院に入り谷口博士の膝下にて内科を専究して學理と實地の研鑽を積むこと二ケ年であつた。大正四年田川郡添田町藏内礦業所醫局に奉職して一層其技倆を磨

いた。大正七年辭して本村に開業して現在に至られて居る。尙氏は大正十一年本村學校醫に、同十二年消防醫に囑托されて本村に於ける醫療上に貢獻する處があつた。氏は大正十三年他の小學校に率先して兒童の蛔虫驅除を勵行して良成績をあげた等兒童衛生上に盡す處があつた又氏は内科専門醫として令名がある。

上頓野青年支會長 田 丸 昇 三 郎 氏

明治二十三年一月二十五日本村に生る、同四十一年福岡農學校を卒業して本郡下境村小學校教員を拜命して兒童教育に努め後感田、上頓野小學校に轉じたが大正三年本村農業技手となり同五年辭して家業に従事し農事に精勵される傍苗木栽培研究をなしつゝある先年販賣組合理事に擧げられ其間杉苗赤枯病にて全滅せんとした際氏は之が豫防の爲め全力をあげて努力した其勞を多とする。目下植木類の植栽の研究に腐心されて居る又一面には大正二年青年會支會長にあげられ次で同六年、十四年と再選され現に青年に勤勞の美風を涵養すべく専心之が指導に努力されつゝある有爲の材である。

産米検査員

香月傳藏氏

明治二十三年二月四日本村に生る、家業の農に従事して専ら精勵されつゝある。明治四十二年本村に公設消防組を設置されるや書記となり大正五年小頭に進み次いで同十四年第三部長に上進して現任中であるが氏は消防組に入つて十八ヶ年の久しき消防上に力を臻されつゝある。尙大正二年組長に推されて十四年に亘つて組合の爲めに斡旋され又本村青年會感田支會長として常に青年の指導に努力されつゝある等實に其勞を多とするのである。其他國勢調査員、勤儉獎勵委員として公共に盡された。大正十四年産米検査員を拜命して、本村産業上にも貢献しつゝあるが、氏は頗る前途を有して居る。

上頓野尋常小學校長

出光徹三氏

明治二十三年九月三日本縣宗像郡赤間町に産聲を擧げた。同四十三年福岡師範學校を卒業して本郡勝野村鴻之巢小學校訓導を拜命して教鞭を執つた以來十五ヶ年の久しきに亘つて同村子女の指導教育をされた。大正十四年四月本村上頓野尋常小學校長に榮

進した。次いで同年五月農業公民學校長を命ぜられ、十五年七月青年訓練所主事となつた。氏は常に詔勅聖旨を奉載して、教育中の兒童をして社會の一員として價値ある性格を保ちて能く任務を盡す處の堅實なる村民を作る事に努力されつゝあるが、氏は郡内校長中の新進であつて前途を有されて居るのである。

有志者

安田仁一郎氏

明治二十五年十一月本村上頓野に生る。大正二年縣立東筑中學校を出て、同四年鞍手郡役所に奉職して學務、文書係を勤務して大正七年十月庶務係となつた。爾來八ヶ年間町村行政監督の任に當つて克く精勵された。其間幾多の選舉、郡制廢止、第一回國勢調査等の事務を執つて手腕を揮ふた。同十四年八月稅務主任に榮進し、部下の指導督勵をなし稅務上の整理に力を臻した。全十五年六月郡役所廢止となるや、福岡縣屬に任せられ庶務課勤務として鞍手、嘉穂兩郡に駐在して忠實其任務に恪勤されつゝあるが氏は年少氣銳にして克く事務に精通し居りて前途を矚目されて居る。

村農會總代

瀧田英雄氏

明治二十八年七月本村に生る、全四十五年鞍手農學校を出て、家事に従事して出精されつゝある氏は大正三年消防組に入り小頭となる。全五年組長となつて組合の爲め奔走する事八ヶ年であつた。次いで十三年村農會惣代に擧げられて、農事上に盡されつゝあるが、一面氏は大正十三年から重要國産として米國に輸出されつゝある。黒軸百合の栽培に着手し本邦各地は勿論朝鮮地方の視察をなして熱心研究を積み現に好成績を上げんとしつゝある。尙本年は大和芋の栽培をも開始して頻りに之が研究中である等一意農産物の栽培研究に腐心しつゝあつて氏が農産上に貢獻しつゝある。其勞を多とするのである。

頓野青年支會長

山本太壯氏

明治三十年十二月十三日本村に産聲をあげた。幼少から家業の農を天職として熱心出精されて居たが不幸にも、大正十二年嚴父を失ふて家督を継ぎ、一家を双肩にして一層家業に奮勵されて居たが、翌十三年相次いで母堂が永眠されたので、憐れ氏は弟妹

の養育をなしつゝ専心業務に努力して家運の隆昌に勵んで居る。氏は年少にして社會的に立つ事が尠くないが現に消防組員として克く勤めつゝある。大正十五年六月衆望にて本村青年會頓野支會長に擧げられて、家業の傍ら青年の指導や社會奉仕作業等に力を盡されつゝあつて、前途を有する青年として矚目されて居る。

前頓野青年支會長

山本儀八郎氏

明治三十五年二月十八日本村に生る。大正六年鞍手農學校を卒業して家業に従事した全十二年歩兵第十四聯隊に入營せられ、克く軍務に精勵して善行證及下士適任證を授けられた、除隊後は専心業務の伸展に努力されつゝ克く在郷軍人たるの本分を盡した結果大正十五年本郡聯合分會から其勞を表彰された。尙氏は大正十四年頓野青年會支會長に推されて全會の革新改善に全力をあげて盡す處があつた。其功や頗る多とするのみならず、常に青年をして健全なる國民たらしめんと之が指導に努め、目下本村青年訓練所助教として専ら心身の訓練に努力されつゝある等有爲の青年である。

大正十五年十一月廿五日印刷
大正十五年十二月一日發行

【定價 錢】

禁 轉 載

著作人兼
發行人

福岡縣鞍手郡直方町大字山部七十五番地
和田泰光

印刷人

福岡縣小倉市京町八丁目二四七
綾部半五郎

印刷所

福岡縣小倉市京町八丁目二四七
關西印刷社
電話一九三番
振替關八三九八番

福岡縣鞍手郡直方町喜多小路

發行所 筑豐之實業社

電話(直方)五〇一番
振替福岡一九四三五番

311
396

終

